

備陽史探訪

第93号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

郷土史入門

会長 田口 義之

去る一月三〇日、当会の平成一二年度の総会が盛大に催された。出席者は七〇名を越えただろうか。かつての総会を思い出すと今昔の感に堪えない。また、出席者諸氏には、本年度の活動予定を見て、さぞ驚かれたことであろう。本会報にも掲載されているとおり、今年も創立二〇周年を記念して例年のほぼ倍の行事予定が組んである。

これは皆さんにとっても、私にとっても大変喜ばしいことである。むしろこれだけの行事にすべて参加するのは容易ではない。

私がこの年間計画を見て喜ぶのは、会の裾野の広がりやこの行事予定を見て感ずるからである。我々の会の例会その他の行事は、特定の個人が主催するのではない。会のよき伝統となっている「担当者」が具体的に計画を立て、それを会の行事として

事務局その他の世話人が協力して実施する。

つまり、これだけの多彩な行事を計画できるというのは、それだけ会の人材が豊富になったということである。これが今回の総会を振り返って私が特に注目する点である。

幾度も述べるように、当会の第一の特徴は「だれでも」会の行事の担当者・講師になれるということである。郷土史や歴史に関心をもつようになる。次第に特に関心をもつ地域や時代、歴史上の人物について、自分なりの意見や考えをもつようになる。そして、それが昂ずると他人に自分の意見を發表したくなるものだ。だが、一般の人はその場がない。我々は探訪の会の会員として、その機会が十分与えられている。これが「備探の会」の醍醐味なのである。しかし、今や三百人の会員を擁するようになった当会としては、まだまだ人材を發掘する必要がある。例会や講師の番が回ってくるのを心待ちにする、そういう会になりたい

ものである。

さて、歴史には関心があるが「郷土史」は苦手である、という人も多い。原因は、どうも地域の歴史の調べ方が分からない、ということにあるらしい。確かに、日本史や世界史一般と違って郷土史には手ごろな入門書がない。だが研究の方法はそれなりにある。

今回、私が担当することになった、二月例会「山南の歴史を探る」を例にとり、その調査研究の方法を述べてみよう。

まず、最初はその地域の郷土史書を探ることだ。この地域の歴史の入門書としては、村上正名先生の「備後の今昔」が手ごろだろう。この本は市民図書館などで容易に見ることが出来る。

地域の歴史のアウトラインが分かったら、もう一歩進めて、見学予定地（今回は光照寺や悟真寺などの仏閣、丸山城・何鹿城などの中世山城）に関する史料を集める。こうしたとき役に立つのが郡誌と江戸時代の地誌だ。山南は沼隈郡だから図書館に行つて「沼隈郡誌」を見る。また、備後叢書の「西備名区」や「備陽六郡志」「福山志料」も必見である。また、図書館を訪ねたときは二階の郷土資料室で沼隈南部の史料を

探す。地元の郷土史の雑誌として「文化財ぬまくま」や少し古いが、地域の総合雑誌「まこと」も必見の資料の一つだ。

書齋での研究はここでひとまず終わる。次はいよいよ現地調査である。現地に出かける前には地図を用意する。国土地理院の二万五千分の一・五万分の一の地形図か市販の福山市の地図を書店で買う。

そして、日を決めて現地を訪ねる。このとき時間の余裕があれば教育委員会や郷土史家の住所氏名を聞き、訪ねてみるのもよい。書物では分からないような機微にわたる話を聞かせてくれるはずだ。あとは調査の結果をまとめ、当日の資料にするだけである。

以上は、あくまで個人で行う場合である。幸いなことに皆さんは備陽史探訪の会の会員である。会には城郭・古墳・歴史民俗の各部会があり、各分野地域の歴史に詳しい方がたくさんいる。分からないことはまず会の人に相談する。

郷土史は受身になるのではなく、自分でテーマを決め、一歩踏み込むべきである、そうすると必ず新しい発見があるはずだ。発見は喜びを呼び、新たな意欲を生む。「新米」郷土史家の誕生である。

平成一二年度総会開催

平成一二年度総会が開催された。冒頭、田口会長が挨拶し、創立二〇周年を迎える今年、会の活動をより充実させる決意を披露しました。続いて神本明輝さんを議長に選出し、議事に入りました。

前年度活動報告・決算報告、同監査報告があり、いずれも承認されました。その後、新役員承認・新年度計画・会費値上げとそれにもなう会則の改正と続き承認されました。議長解任後、午後五時終了しました。今回の会費値上げは、創立二〇周年を迎え、さらに充実した運営を行えるよう財政的な面を強化するためのもので、昨年の総会では、一般会員からも会費値上げの必要性が提案され、役員会でも議論を戦わせた上での提案でした。

また、総会に先立ち午後一時半から出宮徳尚先生(岡山市教委)をお迎えし、総会記念講演会「西日本の古代山城」を開催しました。また、終了後には五時半から備後遺族会館で新年会を催しました。

なお、総会で承認された主な内容は三P〜八Pに掲載しています。

二月徒歩例会

沼隈半島の古里、

山南郷の歴史を探る

沼隈半島の南部をしめる沼隈町の山南は数々の歴史のドラマを秘めた地域です。古くは弥生時代の平形銅剣を出土した日枝神社裏山遺跡、古墳時代の石棺との説もある謎の石櫃。また、安芸門徒の源流ともいえる浄土宗光照寺。中世武士の夢の跡を伝える山城跡。今回は今まであまり足を踏み入れたことのない―福山市のとなり町―沼隈町の史跡を徒歩で訪ねます。奮ってご参加ください。

【実施要項】

〈講師〉田口義之会長

〈実施日〉二月二〇日(日)

*雨天中止(ただし小雨決行)

〈集合時刻〉午前八時三〇分

〈集合場所〉福山駅南口(釣人の像前)

〈参加費〉会員 六〇〇円

一般 八〇〇円

(資料代・傷害保険料を含みます。ただし交通費は各自の負担です)

〈募集人数〉六〇人(申込先着順)

〈参加申し込み〉現在受付中。

電話かハガキで事務局まで。

〈その他〉弁当・飲み物をご持参ください。また、山歩きのできる服装と靴でご参加ください。全体で

約七km歩きます。比較的楽なコースなので誰でも参加できます。

「トモチツバス」福山午前九時発、常石境が浜「三行」に乗り、「天神山」バス停で下車。午後四時「矢線」バス停で解散。帰りのバスは二〇分ごとに運行しています。福山まで約三〇分。バス代は片道五〇〇円です。

【主な探訪予定地】

★山南小学校の石棺：古墳時代後期の石棺と考えられているが、江戸時代の工作物との説もある謎の石造物。

★延広神社の石鳥居：町内で一番古い明神型の石鳥居で、「元和二年(一六一六)八月山南総氏子中」の銘がある。

★丸山城跡：戦国時代後期にこの地に勢力をもったと伝える桑田氏の居城跡で、低い丘の上に輪郭式の郭が残る。桑田氏は天文年間(一五三二〜五五)に姿を現し、当初この地の領主洪川氏の被官であったが、天正元年(一五七三)の洪川氏滅亡後は小早川氏に属し、付近一帯の豪族に成長した。丸山城は土居形式の山城で、その源は中世前期にさかのぼると考えられる。

★悟真寺：延文二年(一三五七)鎌倉光明寺の聖誉上人の再興と伝え、

室町時代にこの地の領主洪川氏の保護を受けた。寺蔵の木造阿弥陀如来座像は室町初期の作である。

★桑田抱臈の墓：抱臈は江戸後期の備後を代表する狂歌師で、著書に「阿武免土産」がある。

★光照寺：中国地方における浄土真宗最初の道場で、寺伝によれば、宗祖親鸞の高弟明光によって創建され、全盛時には備後・備中・安芸・石見・出雲・長門六ヶ国に三七一寺の末寺を擁した。鐘楼と梵鐘は県重文に指定されている。

★何鹿城跡：森脇山城ともいい、天文年間、丹波桑田郡からこの地に入ったという桑田氏が土地の豪族箱田氏を追い落として居城したという。比高七〇mの典型的な階段式山城で、曲輪・堀切などが残っている。

★平形銅剣出土地・日枝神社所蔵平形銅剣(県重文) 拝観：日枝神社の神宝として伝わる弥生時代の平形銅剣は、神社東方の「石かぶとの窟(夫婦岩)」から出土した。

★西光寺の梵鐘：県重文。天文一三年(一五五四)六月、大内義隆が厳島神社に奉納したもので、明治初年に西光寺の什物となった。

*ただし、天候その他の都合で変更する場合があります。

平成11年度支出入決算報告

勘定項目	収入額	摘要	勘定項目	支出額	摘要
会費	835000円	293人	会報・行事案内印刷費	315734円	
《内 訳》 一般会員 241人 3000円×241=733000円 夫婦会員 22組 4000円×22= 88000円 中途割引(10月以降)6人 2000円× 6= 12000円 中学生 2人 1000円× 2= 2000円			通信費	285855円	切手代など
			講師講演料等	142360円	講師宿泊・交通費合
			事務局費	81127円	事務費含む
			広告費	10500円	
			諸会費	20000円	
			部会費	14775円	
			慶弔費	26730円	佐藤壽夫さん香典等
			備品費	25000円	メガホン
			掛迫報告書作成費	200000円	一部未納
			書籍・資料売り上げ	53800円	
雑収入	329167円	例会収入含む	雑 費	43070円	
利息	1304円				
以上計	1219271円		以上計	1260151円	
前期繰越金	90416円		次期繰越金	49536円	
総 計	1309687円	／	総 計	1309687円	／

別に特別積立金500000円があります。

監査の結果、上記のとおり相違ないことを承認します。 2000年1月28日

監査委員 藤井忠夫、杉原外志子(印)

平成12年度予算

項 目	収入額	摘要	項 目	予算額	摘 要
会費	958000円	252名	会報・行事案内印刷費	320000円	
《内 訳》 4000円×220名=880000円 5000円×15組=75000円 1500円×2名=3000円			通信費	330000円	切手代など
			講師講演料等	250000円	講師宿泊・交通費合
			事務局費	80000円	事務費含む
			記念行事開催費	100000円	看板など
			部会費	60000円	3部会で等分
			備品費	35000円	ワープロコンパター
寄付金	125000円		掛迫報告書作成費	50000円	残 金
雑収入	450000円	例会収入・書籍販売など	『山城志』	300000円	
前期繰越金	49536円		予備費	57536円	
総 計	1582536円	／	総 計	1582536円	／

20周年記念出版特別予算

予 算 項 目	予 算 額	摘 要
『ふるさと探訪』出版費(一部)	500000円	特別積立金の全額

(註) 記念出版の総費用は100万円の予定。残金は2年～3年計画で支払い予定。

平成11年度活動報告

郷土史講座・特別歴史講演会

日程	講座	内 容	講 師	会 場	参加数
1/24(日)	総会特別講演会	『神辺町における最近の発掘調査から』	佐藤一夫	備後遺族会館	66名
2/27(土)	第2回郷土史講座	『杉原氏の出自について-杉原光平を中心として-』	木下和司	福山市民図書館集會室	34名
3/27(土)	第3回郷土史講座	『三角縁神獣鏡と古墳』	網本善光	福山市中央公民館	39名
4/24(土)	第4回郷土史講座	『謎の武将毛利元康の実像に迫る』	小林定市	福山市中央公民館	34名
5/29(土)	第5回郷土史講座	『戦国水野氏の興亡』	田口義之	福山市民会館会議室	63名
6/26(土)	第6回郷土史講座	『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』	安原善佳	福山市中央公民館	36名
7/24(土)	第7回郷土史講座	『今高野山城主上原氏の滅亡について』	小林浩二	福山市中央公民館	44名
8/21(土)	特別歴史講演会	『中世山城と機能と変遷』	千田嘉博	広島県立歴史博物館講堂	約150名
9/25(土)	第9回郷土史講座	『神殿の歴史について』	平田恵彦	福山市中央公民館	34名
10/30(土)	第10回郷土史講座	『東北の古墳』	山口哲晶	福山市民図書館集會室	12名
11/27(土)	第11回郷土史講座	『謎の多い毛利氏の八箇国分限帳について』	出内博都	福山市民図書館集會室	27名
12/11(土)	第12回郷土史講座	『福山市加茂町尾ノ上古墳について』	戸田和吉	サンピア福山	44名

バス例会・徒歩例会・古墳めぐり・一泊旅行

日程	行 事 内 容	講 師	参加数
2/21(日)	徒歩例会『小早川氏の名城、高山城に登る』	田口義之	83名
3/14(日)	バス例会『備中松山城に登る-毛利氏・三村氏の史跡を訪ねて-』	城郭部会	54名
4/18(土)	バス例会『誰も知らないおかやま』	平田恵彦	55名
5/ 5(土)	第8回親子の古墳めぐり『神辺町の古墳を歩こう』	古墳部会	125名
6/ 6(土)	バス例会『賀茂台地に中世武士の面影を訪ねる』	田口・木下	46名
9/26(日)	バス例会『誰も知らないくらしき』	平田恵彦	51名
10/ 3(土)	一泊旅行『豊饒の大地、播州平野をゆく』	旅行委員	48名
11/14(土)	秋の古墳めぐり『備北の古墳を訪ねる』	古墳部会	39名
12/ 5(土)	徒歩例会『引野町の史跡めぐり』	田口・寺崎・三好	56名

歴民研オリジナル企画

日程	行 事 内 容	講 師	参加数
3/28(日)	静喜の史跡『神戸・西宮の史跡めぐり-五色塚と平教麿の鐘を寺を訪ねて-』	平田恵彦	39名
5/16(土)	井原線開通記念の旅『国史跡 備中福山城に登る』	種本 実	63名
10/31(日)	徒歩企画『神無月、錦織の吉備路を味わう』	田口・平田恵	66名
12/19(日)	静喜の史跡『日輪は四天王寺の天空に輝く』	平田恵彦	37名

歴民研歴史小説読書会(座長 種本実)

日程	課題図書	著 者	会 場	参加数
9/ 4(土)	『風流武辺』	津本陽	福山市中央公民館	11名
11/ 6(土)	『梟の城』	司馬遼太郎	福山市中央公民館	11名

定期講座

日程	講座内容	部 会	座 長	会 場
①毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴民研	平田恵彦	福山市中央公民館
②毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭部会	出内博都	福山市中央公民館

《城郭研究部会活動報告》

- ①月例研究会「中世を読む会」原則として第3土曜日午後7時から中央公民館で開催。
『備後古城記』檀上本の解説・研究会。一書精読。毎回15名前後が参加。
- ②郷土史講座担当
- | | | |
|------------|-----------------------|----------|
| ★ 2/27(土) | 『杉原氏の出自について』 | 木下和司 |
| ★ 4/24(土) | 『謎の武将毛利元康の実像に迫る』 | 小林定市 |
| ★ 5/25(土) | 『戦国水野氏の興亡』 | 田口義之 |
| ★ 7/24(土) | 『今高野山城主上原氏の滅亡について』 | 小林浩二 |
| ★ 8/21(土) | 『中世山城の機能と変遷』 | 千田嘉博(招待) |
| ★ 11/24(土) | 『謎の多い毛利八箇国御時代分限帳について』 | 出内博都 |
- ③バス例会担当
- ★3/14(日)『備中松山城に登るー毛利氏・三村氏の史跡を訪ねてー』
全国でも珍しい中世の城跡と近世の城郭が残り、備中国制覇の野望に燃えた有力国人たちが興亡を繰り返した松山城と石火矢武家屋敷・頼久寺・山中鹿介の墓等を訪ねた。
- ④徒歩例会担当
- ★2/21(日)『小早川氏の名城、高山城に登る』
鎌倉時代初期小早川繁平がこの地に下向して築城し、小早川隆景が新高山城に本拠を移すまで約300年間、たびたびの戦乱にも耐えた天下の名城を1日かけて見学。
- ⑤山城調査
- ★2/28(日)福山市熊野町の「中山田城」測量調査。会員14名、地元7名参加。
★3/21(日)前回に続き「中山田城」測量調査。霧雨の中決行、地元9名参加。
- ⑥山城現地踏査
「『備後古城記』を読む」の担当者が比婆郡と三次市の山城約60城を探訪した。

《古墳研究部会活動報告》

- ①第17回「親と子の古墳めぐり」担当
★5月5日(祝)「神辺町の古墳めぐり」(法童寺古墳～迫山古墳を歩く)
- ②第10回「秋の古墳めぐり」を担当
★11月14日(日)「備後北部の古墳～東城町と西城町の古墳～」
(南山古墳・八鳥横穴墓・大迫山第1号古墳・辰の口古墳)
- ③郷土史講座担当
- | | | |
|------------|--------------------|----------|
| ★ 3/27(土) | 『三角縁神獣鏡と古墳』 | 網本善光 |
| ★ 6/26(土) | 『四隅突出型墳丘墓の謎に迫る』 | 安原善佳 |
| ★ 10/30(土) | 『備後北部の古墳について』 | 山口哲晶 |
| ★ 12/11(土) | 『福山市加茂町 尾ノ上古墳について』 | 戸田和吉(招待) |
- ④掛迫第6号古墳測量調査報告書作成の継続
★現在網本氏を中心に編集・校正作業継続中で、まもなく上梓の予定。

《歴史民俗研究部会活動報告》

- ①月例研究会「『古事記』を読む会」原則として第2土曜日午後2時から中央公民館で開催。
- ②郷土史講座担当
- | | | |
|----------|--------------------|----------|
| ★1/24(日) | 『神辺町における最近の発掘調査から』 | 佐藤一夫(招待) |
| ★9/25(土) | 『神殿の歴史について』 | 平田恵彦 |
- ③バス例会担当
- | | | |
|----------|--------------------|-------|
| ★4/18(土) | 『誰も知らないおかやま』 | 平田恵彦 |
| ★9/26(日) | 『誰も知らないくらしき』 | 田口・木下 |
| ★6/6 | 『賀茂台地に中世武士の面影を訪ねる』 | |
- ④徒歩例会担当
- | | | |
|----------|-------------|----------|
| ★12/7(日) | 『引野町の史跡めぐり』 | 田口・寺崎・三好 |
|----------|-------------|----------|
- ⑤オリジナル徒歩企画
- | | | |
|-----------|---------------------------------------|---------|
| ★ 3/28(日) | 『静かぶの旅』『神戸・西宮の史跡めぐりー五色塚と平教盛の須磨寺を訪ねてー』 | 平田恵彦 |
| ★ 5/16(土) | 井原線開通記念の旅『国史跡備中福山城に登る』 | 種本 実 |
| ★10/31(日) | 徒歩企画『神無月、錦繡の吉備路を味わう』 | 田口・平田恵彦 |
| ★12/19(日) | 『静かぶの旅』『日輪は四天王寺の天空に輝く』 | 平田恵彦 |
- ⑥歴史小説読書会を開始(原則として隔月で実施)
- | | | |
|----------|-------------|------|
| ★9/4(土) | 『風流武辺』津本陽著 | 種本 実 |
| ★11/6(土) | 『泉の城』司馬遼太郎著 | |

平成12年度活動計画

郷土史講座・特別歴史講演会

実施日	講座	内 容	講 師	会 場
1/30(日)	総会特別講演会	『西日本の古代山城—その軍事施設の視点—』	出宮徳尚	ふくやま市民交流館
2/26(土)	第2回郷土史講座	『蛇門山からみた常城・茨城』	寺崎久徳	ふくやま市民交流館
3/25(土)	第3回郷土史講座	『鎌倉時代末期前後の福山地方の宗教』	小林定市	福山市中央公民館
4/22(土)	第4回郷土史講座	『烽(とぶひ)について』	七森義人	福山市中央公民館
5/27(土)	第5回郷土史講座	『謎の遺跡』	篠原芳秀	福山市中央公民館
6/24(土)	第6回郷土史講座	『海路藻屑(かいろもくず)について』	石井良枝	福山市中央公民館
7/29(土)	第7回郷土史講座	『備後における「南北朝遺文」について』	出内博都	福山市中央公民館
8/26(土)	第8回郷土史講座	『古文書を読む—近世文書中心に—』	杉原道彦	福山市中央公民館
9/30(土)	第9回郷土史講座	『月の輪古墳について』	網本善光	福山市中央公民館
10/21(土)	特別歴史講演会	『未 定 』	未定(＊)	未 定
11/25(土)	第11回郷土史講座	『福山—歴史の謎』	田口義之	福山市中央公民館
12/9(土)	第12回郷土史講座	『未 定 』	未 定	未 定

(註) ＊岸田裕之広島大学教授に依頼予定。会場・日程は変更する場合があります。

バス例会・一泊旅行

実施日	内 容	講 師
3/5(日)	バス例会『夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ—もう一別れの津山に会いにゆく—』	平田恵・平田雅
4/23(日)	バス例会『槌山城に登る—西条守護居城の縄張りを探る—』	小林浩二・寶亀
5/20・21(日)	一泊旅行『我が手に国のまほろばを一遙かなる古代大和の夢を追う—』	平田恵・坂本・三好
6/4(日)	バス例会『伊予今治の史跡を訪ねる—しまなみ海道を越えて—』	田口・木下
9/17(日)	バス例会『備前福岡・長船の古代中世を訪ねる』	種本・平田恵彦
10/1(日)	バス例会『大富山城に攻め登る—高くして白雲山腰にかかる宮氏の名城—』	岡田・矢野
11/5(日)	バス例会『月の輪古墳に登る—あの伝説的な発掘調査の跡をたどる—』	網本善光

徒歩例会・特別徒歩企画・親と子の古墳めぐり・青春きっぷの旅

実施日	内 容	講 師
1/9(日)	青春きっぷの旅『石の宝殿・明石の史跡めぐり』	平田恵彦
2/6(日)	20周年特別企画『沼田庄小坂郷の中世を訪ねて』	坂本・寶亀
2/20(日)	徒歩例会『沼隈半島の古里、山南郷の歴史を探る』	田口義之
3/26(日)	青春きっぷの旅『桜花爛漫、醍醐蒼天に咲き薫る—洛南の名園を訪ねて—』	平田恵彦
4/9(日)	20周年特別企画『風光る黄葉山に桜花舞う—神辺宿の史跡を歩く—』	田口義之
5/5(日)	第18回親と子の古墳めぐり『神辺町から福山市加茂町の古墳を歩く』	古墳部会
11/19(日)	20周年特別企画『神楽月、藁塚野辺をひた歩く—高梁川右岸の石造物を味わう—』	平田恵彦
12/3(日)	20周年特別企画『笠岡の古代と近代』	網本・七森
12/17(日)	20周年特別企画『常城推定地を探る』 (1月23日から順延)	七森義人

定期講座・歴史小説読書会

日 程	講座内容	部 会	座 長	会 場
①隔月第1土曜日(午後)	歴史小説読書会	歴民研	種本 実	福山市中央公民館
②毎月第1土曜日(夜間)	古墳講座Ⅶ	古墳部会	山口哲晶	未 定
③毎月第2土曜日(午後)	『古事記』を読む	歴民研	平田恵彦	福山市中央公民館
④毎月第3土曜日(夜間)	『備後古城記』を読む	城郭部会	小林浩二	福山市中央公民館

《城郭研究部会活動計画》

- ①月例研究会「中世を読む会」原則として第3土曜日午後7時から中央公民館で開催。
- ②郷土史講座担当
 ★ 3/25(土) 『鎌倉時代末期前後の福山の宗教』 小林定市
 ★ 7/29(土) 『備後における「南北朝遺文」について』 出内博都
 ★ 8/26(土) 『古文書を読む－近世文書を中心に－』 杉原道彦
- ③バス例会担当
 ★ 4/23(日) 『槌山城に登る－西城守護居城の縄張りを探る－』 小林浩二・寶亀
 ★ 10/1(日) 『大富山城に攻め登る－峯高くして白雲山腰にかかる宮氏の名城－』 岡田・矢野
- ④20周年特別徒歩企画担当
 ★ 2/6(日) 『沼田庄小坂郷の中世を訪ねて』 坂本・寶亀
- ⑤山城平板測量調査
 ★ 11/12・26(日)の両日、三原市の「桜山城」測量調査。地元も参加。

《古墳研究部会活動計画》

- ①第18回「親と子の古墳めぐり」担当
 ★ 5/5(祝)「神辺町～加茂町コース」(大坊古墳～猪の子古墳まで)
- ②第11回「秋の古墳めぐり」を担当
 ★ 11/5(日)「月の輪古墳に登る」岡山県柵原(やなはら)町
- ③徒歩例会・20周年特別徒歩行事
 ★ 12/3(日)『笠岡の古代と近代』 網本・七森
 ★ 12/17(日)『常城推定地を探る』(1/23から順延) 七森義人
- ④郷土史講座担当
 ★ 4/22(土) 『烽(とぶひ)について』 七森義人
 ★ 5/27(土) 『謎の遺跡』 篠原芳秀
 ★ 9/30(土) 『月の輪古墳について』 網本善光
- ⑤古墳講座復活 毎月第1土曜日午後7時より 場所は不定
 内容: 1. 文献の抄読会(やや専門的な内容になります)
 2. 未報告(未発表資料)を実測検討し、基礎資料として『山城志』に発表(ただし発表日時は未定)。
 *問い合わせはハガキのみにて「山口(〒721-0942福山市引野町2-13-7)」まで。
- ⑥20周年記念出版に参加
 ★古墳研究部会 1.「深安郡神辺町の古代」 2.「松永湾の古代」
 ★個人として山口哲品、網本善光、篠原芳秀、安原誉佳がそれぞれ執筆
- ⑦古墳講座基礎資料編
 ★第1回→長崎古墳(福山市引野町)墳丘測量調査
 2000年の2月以降、墳丘および石室の測量調査実施→『山城志』あるいは他で報告

《歴史民俗研究部会活動計画》

- ①月例研究会「『古事記』を読む会」を継続。第2土曜日午後2時から中央公民館で開催。
- ②郷土史講座担当
 ★ 1/30(日)『西日本の古代山城－その軍事施設の視点－』 出宮徳尚(招待)
 ★ 2/26(土)『蛇円山からみた常城・茨城』 寺崎久徳
 ★ 6/24(土)『海路藻屑(かいろうもくず)について』 石井良枝
 ★ 11/25(土)『福山－歴史の謎』 田口義之
- ③バス例会担当
 ★ 3/5(日)『夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ－もう一つ別の津山に会いにゆく－』 平田恵・平田雅
 ★ 9/26(日)『備前福岡・長船の古代中世を訪ねる』 種本・平田恵彦
- ④20周年特別徒歩企画「青春きっぷの旅」担当
 ★ 1/9(日)青春きっぷの旅『石の宝殿・明石の史跡めぐり』 平田恵彦
 ★ 3/26(日)青春きっぷの旅『桜花爛漫、醍醐蒼天に咲き薫る－洛南の名園を訪ねて－』 平田恵彦
 ★ 4/9(日)20周年特別企画『風光る黄葉山に桜花舞う－神辺宿の史跡を歩く－』 田口義之
 ★ 11/19(日)20周年特別企画『神楽月、藁塚野辺をひた歩く－高梁川右岸の石造物を味わう－』 平田恵彦
- ⑤歴史小説読書会を継続(原則として隔月で偶数月の第1土曜日の午後実施)

新年度役員決定!

平成一二年度総会において、左記のとおり役員および監査委員が決定・承認されました。任期は二年です。

▼名誉会長 神谷和孝

▼会長 田口義之

▼副会長 山口哲晶・中村勤史

▼事務局長 平田恵彦

▼事務局員 佐藤秀子〔会計〕・佐藤錦士・寺崎久徳・木下和司・三好勝芳・塩出基久

▼参与 出内博都(城郭部会顧問) 佐藤洋一・末森清司・齋田英夫・後藤匡史・中西晃

★歴史民俗研究部会

▼部会長 種本実 ▼副 平田恵彦

▼評議員 平田雅郁・小林さなえ

★古墳研究部会

▼部会長 山口哲晶 ▼副 網本善光

▼評議員 篠原芳秀・七森義人・安原誉佳

★城郭研究部会

▼副部会長(部会長代行) 小林浩二

▼副部会長 杉原道彦

▼評議員 黒木日出人・坂本敏夫・高尾辰巳・寶龜雅郎

*退任は末森清司・広川茂夫・石井良枝・柿本光明の四氏です。

☆監査委員 藤井忠夫・杉原外志子

今年度会報・行事案内発送予定

左記は作業日です。郵便局への持ち込みは原則として月曜日になりますので、お手元には火・水曜日あたりが届くはずですが、また、これはあくまでも予定です。さまざま都合で発送日程は変更される場合があります。

一月 八日(土) 行事案内(済)
二月 五日(土) 会報九三号
三月 一日(土) 行事案内
四月 八日(土) 会報九四号
五月 三日(土) 行事案内
六月 三日(土) 会報九五号
七月 五日(土) 行事案内
八月 二日(土) 会報九六号
九月 九日(土) 行事案内
A 一〇月 一四日(土) 会報九七号
A 十一月 一日(土) 行事案内と記念出版「ふるさと探訪(仮題)」これはできるだけ手渡しをします。
C 二月 二日(土) 会報九八号

事務局日誌

一月二八日(日) 城郭部会現地踏査。八幡山城・青河城・勝山城。参加三名。
二月五日(日) 「引野町の史跡めぐり」開催。講師は田口義之会長・寺崎久徳さん・三好勝芳さん。参加五六名。
二月七日(火) 役員会参加一五名。
二月八日(水) 城郭部会現地踏査。国広山城・二ツ山城参加三名。
二月十一日(土) 午後三時から特別郷土史講座「福山市加茂町尾ノ上古墳について」開催。講師は戸田和吉先生。参加四六名。新聞社二社取材に来る。於サンピア福山。午後五時半から忘年会。参加三七名。於サンピア福山。
二月十二日(日) 城郭部会「亀山城」現地調査。参加三名。
二月十八日(土) 「備後古城記」を読む。参加一〇名。
二月十九日(日) 青春きつぷの旅「日輪は四天王寺の天空に輝く」実施。講師は平田恵彦さん。とても寒い一日だった。参加三七名。これにて年内の行事はすべて終了。
二月二十一日(火) 会報九二号発送作業。都合により事務局長ひとり自宅で作業、泣きが入る。

一月八日(土) 午後二時「古事記」を読む。参加二〇名。終了後、行事案内発送作業。
一月八日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅶ」新しい試みで文献の読み合わせ勉強会となった。参加八名。於三吉町「SEVENS」。
一月九日(日) 青春きつぷの旅「石の宝殿・明石の史跡めぐり」講師は平田恵彦さん。参加二八日。
一月九日(日) 城郭部会比叡尾山城現地調査。参加五名。
一月十一日(火) 役員会。総会の運営進行について協議。参加一九名。
一月十五日(土) 午後七時。「備後古城記」を読む。参加一三名。
一月三〇日(日) 午後〇時三〇分。役員会。於ふくやま市民交流館。
二月三〇日(日) 午後一時三〇分。総会記念講演会「西日本の古代山城開闢。講師は出宮徳尚先生。岡山市教委。参加八〇名。於ふくやま市民交流館。
一月三〇日(日) 午後三時四五分。平成一二年度総会開催。参加七三名。於ふくやま市民交流館。
一月三〇日(日) 午後五時三〇分。新年会開催。参加五七名。於備後遺族会館。
*とくに断りが無い場合は会場はすべて福山市中央公民館です。

Aは「古事記」を読む終了後、参加者と事務局員による発送作業。
Bは「備後古城記」を読む終了後、参加者による発送作業。
Cは「歴史小説読書会」参加者と事務局員による発送作業。

備陽史探訪の会 一泊旅行

加古川流域に

「播磨国風土記」と国宝を探る

小島袈裟春

▼「播磨国風土記」と地名伝承

元明朝、和銅六年(七二二)中央官命に基づいて選述なされたと思える「播磨国風土記」の中に意味深い記事がある。

昔、神話の時代、姫路市のあたりが海であったころ、大汝命の子火明命は考えることも行状も常軌を逸していた。困り果てた大汝命夫婦はその責め苦から逃れようと、火明命を船に誘って因達(いんたつ)の神山(現姫路市の北、八丈岩山)に行き、騙して水を汲みに行かせて大急ぎで船を出し、火明命を置き去りにしてしまった。水を汲んで戻った火明命は大いに怒り、大波風を起こして父の船を襲い壊してしまったという。

その場所を「船丘」といい、ほか十三個の積み荷の落ちたところにもそれぞれ丘名がついた。たとえば、現在の姫路城の丘は「蚕子」の落ちたところで、「日女道丘」といい、その他の丘もその周辺に散在しているのだそうだ。

大汝命は後悔して妻の弩都比売に「悪き子から逃れんとして返って波

風に遭い、手痛くたしなめられてしまった」と愚痴ったという。

神代の昔も親子の關係は難しかった。「播磨国風土記」の編集者も深く領いてこの物語を載せたのであろう。それは現代も続く教訓なのである。たとえどのような子であろうとも、親が子を見捨てることは許されないと……。

さて、加古川の支流、満願寺川の西側、北条盆地の一角に玉丘古墳群が広がっている。主墳の玉丘古墳(前方後円墳)は周濠に水を湛え、東西に陪塚を従えて鎮まっていた。

私はだいぶ以前、「播磨国風土記」を一読した時からこの古墳を見学しなかったのだが、その機会が無く、今回ご案内をいただいで誠にありがたかった。前方部から鬱蒼と樹木の茂る墳丘に登り、後円部の大きな盗掘穴と凝灰岩(高室石)の石棺の破片を見つめながら講師にご説明いただいた。

全長は一〇五m、後円部の高さ九m、三段に築かれ葺石、埴輪の痕跡があり、築造の年代は五世紀ころのこと。この古墳は明治一七年(一八八四)に盗掘され、刀剣・勾玉・管玉が出土したというが、現品は所在不明だそうだ。

この玉丘古墳にかかわる「播磨国

風土記」等の記事の大略を見ると、五世紀、大泊瀬幼武(雄略天皇)は皇位継承権を持つ皇子たちを皆殺しにして皇位についたが、その中に履中天皇の子、市辺押磐皇子があった。

この市辺押磐皇子には意(億計、兄)と袁(弘計、弟)の二人の皇子がいたが、父の死を知ると大和を逃げ出して、播磨の国美囊の郡、志染の里に隠れ住んだ。この地で村の首、忍海部造細目に使われて約二六

年間を過ごすが、大和の官吏、山部連少(小)楯(伊与久目部小楯)によって大和朝廷に迎えられ、顕宗天皇(弟)、仁賢天皇(兄)の順でともに皇位についたという。

その二皇子が志染にいたとき、播磨の国造許麻の娘、根日女命に求婚した。もちろん根日女命は承諾したのであるが、不思議なことに二人の皇子が譲りあっているうちに根日女命は年を取って死んでしまった。二皇子はたいへん悲しんで使者を送り、良き地を選んで墓を造り、玉を以て墓を飾るよう仰せられた。それでその墓を「玉丘」と名づけ、その村を「玉野」と定めた、という。

これらの説話は一見矛盾に満ちているようだが、必ずしもそうとはいえないのである。二皇子の姉または叔母とされ、清寧天皇の崩御後、一

時政務を朝見された飯豊青皇女は、忍海郎女とも称されたという。

「日本書紀」によれば、二皇子を養った縮見(志染)の首は忍海部造細目だという。幼児期の名称は直轄地を称する事が多い(たとえば額田部皇女とか)。したがって、播磨国は履中天皇系と深い関係があったのであろう、と私は考えている。

二皇子の播磨入りもそうした縁を頼ったことであろう。そのときの二皇子の年齢を十歳と七歳とすれば、「日本書紀」の記事から、雄略天皇治世二十三年ののち、清寧天皇の三年に大和に迎えられたので、意(億計)は三十六歳、袁(弘計)は三十三歳までを播磨で過ごしたのである。結婚の年齢も必要性も十分に満たすはずで、求婚の申し込みをしたからといって何の不自然もない。

ただこの二人は実に仲が良かった。兄は思慮深く心穏やか、弟は直情径行だが兄を信頼した。兄は弟に先に家庭を持たせたかったのであろう。弟は兄を先にと譲る。やがて話は決まらぬまま大和に迎えられたのだと思う。

何しろこの二人は良いことは必ず兄弟で譲り合ったと「播磨国風土記」や「古事記」「日本書紀」にも記される有名な出来事なのだから。

▼比礼墓(前方後円墳)

第一二代景行天皇の皇后、稲日大郎女姫(印南別嬢)の陵墓、日岡陵(古墳)に治定されている。「播磨国風土記」の賀古郡の最初に出てくる物語には次のようにある。

大帯日子命(第十二代景行天皇)が播磨の加毛の郡(現小野市のあたり)の息長命を仲人として印南別嬢に求婚の旅に出かけ、数々の苦心のちめでたく結ばれて「城の宮」に住んだ。年を経て印南の嬢がその宮で薨去されたので日岡に墓を造り、屍を捧げて印南川(加古川)を渡ろうとしたとき、突然川下から大きな旋風が起って屍は水中に沈んでしまった。しかし、いくら探しても見つからず、ただ褶(比礼)と匣(化粧の箱)しか得られなかつたので、仕方なくその二品を葬った。それの人々が「比礼墓」と呼んだ。

風土記の昔から特定の人物の名が知られ、大切に守られてきた古墳は非常に珍しく、貴重な存在である。現在は宮内庁の管理下で、嚴重な垣根に囲まれて近づくことはできないが、ある意味でいえば、この古墳ほど調査してみたい古墳もまた無い：かく考える私是不見識なのであるうか。ともあれ比礼墓を拜して私は大満足であった。

▼一乗寺

旅行の資料によれば、大化五年(六四九)法道仙人という超人が孝徳天皇の病氣平癒を祈念して効験を顕わし、天皇の奇進を受けて建立したのが同寺の前身だという。幾たびかの火災を受け、寛永五年(一六二八)姫路藩主本多忠政が再建したのが今の本堂だそうだ。

本堂はいにく平成の修理中で拝観はできなかったが、石段の途中に承安元年(一一七一)の銘があつて兵庫県では最古の木造塔婆という国宝の三重塔が、複雑で、しかも整つた斗拱と蔓股、反り返つた尾垂木を見せて建つていた。私はこうした建築物にはあまり詳しくはないのであるが、基壇が亀腹なのが珍しかった。ご説明によれば、建物全体に古代から中世への過渡期の特長が窺えるのだそうだ。

▼浄土寺

私の宗教は浄土宗の故か「浄土」という名称に何となく親しみがある。この寺は高野山系の真言宗の事だがそれはあまり気にならない。

国宝の浄土堂。梁行・桁行とも方三間の宝形造り。三間といつても寸法のことではなく、柱と柱の間隔の事である。旅行の案内書によれば、一辺一八・一八mの堂々たる建物で

ある。板壁も朱と白に塗り分けられて華やかであった。

堂内に入つて思わず唖つてしまった。堂の真ん中、大屋根を支える四本の柱の間の円形須弥壇に、雲形台座に立つた阿弥陀様。像高五・三m、両脇侍三・七一m、すべて金箔に輝くそのお姿は、見上げる私を圧倒したのである。堂内は広々と板張りの床、西側は薙窓が続き、午後の日光が差し込むと床と天井と三尊像に反射して光は堂内に満ち、極楽浄土を現出するのだそうだ。

三尊像の作製は胎内銘から、建久六年(一一九五)、堂の落慶法要は、建久六年(一一九七)鎌倉時代初期のことである。なお、この安定を欠く立像が、倒れないための工夫が種々施行してあるのだが、その解説はここでは省略する。

▼朝光寺

社町にある高野山真言宗の寺院で、一乗寺と同じく法道仙人の創建と伝えられる。現本堂は、応永二十年(一四一三)の銘板があつて国宝に指定され、他に鐘樓などが国重文に指定されている。江戸時代ころまでは大いに信仰を集めたそうだが、今はやや廃れている。

床が高く、豪快な斗拱や、内部の外陣の虹梁など雄大な様相とは対照

的に、後世の補作といわれる正面の向拝の繊細さが目立った。ほかに多宝塔や仁王門も残り、門前の溪流には岸壁を落ちる滝も見えて、一帯の木立とともに、夏の一時の適所と思えた。ただし、まむしには注意が必要と思う。

▼鶴林寺

一般的には聖徳太子創建と考えられているが(私もそうだった)、今回の旅行資料では「兵庫県史」を引用されて、武蔵国の大目(国庁の役人)身人部春則が播磨の国に住んで平安末期に発願建立した、と両論併記されているところが凄いと思う。

広い境内にたくさん建物があつて観光や参詣人で賑わっていた。建物の中では、本堂の東南の太子堂の檜皮葺の屋根、特に正面が向拝様に仕上げているところが印象に残る。なお、本堂と太子堂はともに国宝とのことであつた。

今回の旅行では、記した以外にも数々の史跡、遺跡をご案内いただいたのであるが、紙面の都合で省略した。また、毎年思うのであるが、備陽史探訪の会の旅行案内は史跡資料として充分活用できる文書なのである。不参加の場合も有料で入手できるように検討をお願いする次第である。(一九九九年十月)

日輪は四天王寺の天空に輝く —なにわ夕陽丘の史跡を歩く—

土屋 大作

大正生まれが青春きつぷをもつてなにわの史跡巡りに向かう。何となく若やいだ気分での私の出発であった。

平成十一年一月一九日早朝、福山駅改札口集合者は二七名。引率者兼講師の平田さんから資料を渡され、その際グループ班長を仰せつかり面喰らう。五時福山駅始発の電車は師走のせいかわりと空いていた。東福山・大門・岡山の各駅からの参加者が加わり総勢は三七名。

網干・大阪駅で乗り換え、環状線内回り線で天王寺駅に着く。電車で渡された資料に目を通すが、事前調査の行き届いた豊富な内容の説明文にはいつもながらただただ脱帽である。頭に納めようと努力したが、いくらも入らないうちに下車となる。

▽四天王寺

南北の中門と講堂をとり込んだ回廊の内側に、塔と金堂が一直線に並ぶ。「四天王寺式」伽藍が我々を迎えてくれる。早速平田さんの詳細な説明がある。この寺が戦後天台宗から分派独立した「和宗」の本山である。と、戦火や落雷による火災に幾度も見舞われたため鉄筋コンクリート造

りとなったが、起源は古く聖徳太子ゆかりの寺であることを知る。

聖徳太子が物部守屋の乱に四天王像を安置して戦勝祈願を行ったのが始まりとされるが、推古帝の御代現在地に移り、敬田院・悲田院・施薬院・療病院が造られて、太子の理想とした仏教の交流と社会救済事業がここで行われた。社会福祉の声がかまびすしい昨今であるが、千四百年も前、老人や孤児の救済施設を設け、病院まで造った太子の業績・先見性は立派というほかない。

金堂に入り中を一巡したあと私は塔内部には入らず納経所へと走った。続いて宝物館見学へと向かう。藤原時代の優麗さをたたえた極彩色の「扇面法華経冊子」、飛鳥時代の直刀「丙子椒林剣」など国宝・重文が収蔵され、古代日本の仏教芸術に接することができた。

この日は晴天ながら肌寒く腹も空いたというところで、境内の休憩所で早めの朝食となる。

▽黒田藩蔵屋敷長屋門跡・慶沢園

天王寺公園内の陸橋を渡ると、旧黒田藩蔵屋敷長屋門の構えが現れる。それは筑前黒田藩の蔵屋敷の一部を移したもので、藩が財政保全をはかるため、自藩の米等の産出物を値良く販売するため貯蔵した建物の名残

である。

門跡の奥に名園慶沢園がある。明治末期に造られたこの林泉式回遊庭園は、住友財閥が大阪市に寄贈したものである。名木名石の見事な配置は見惚れさせられた。

☆茶臼山古墳と一心寺

慶沢園を抜けると茶臼山古墳がある。この古墳は前方後円墳で、別名を「荒陵」といい、古くから荒らされていたため墳丘の改変がひどく、詳しい調査もされていないため実態は明らかでない。しかし墳丘上に徳川家康が大阪冬の陣で本陣を置き、翌年の夏の陣では豊臣方武将の真田幸村が陣を構えた場所として有名である。ここからわずか二〇〇mほどの一心寺のあたりに陣取った相手方と、死闘をくり返していたと思うと深い感慨を禁じ得なかった。

一心寺はかつて法然上人がここに草庵を結び、すぐ下の波打際から続く海のかなたに沈む夕陽に向かって念仏を唱え、「日想観」修業を行ったところである。それにしても山門・仁王門像は古刹に似合わぬ斬新なつくりで驚かされたことである。

☆真田幸村戦死の地

一心寺から出て国道を渡ると幸村戦死の地がある。大阪夏の陣で家康の本陣を襲い、彼を討ち取らんとし

て逆襲にあい討死した幸村の死を悼んだ碑が建てられていた。

☆大江神社

四天王寺の鎮守として聖徳太子が祀られたとの由緒書のある神社だが、松尾芭蕉がここから西方に沈む夕陽をみて詠んだ「あかあかと日はつれなくも秋の風」の句碑が立っていた。

▽勝慶院(愛染堂)

四天王寺のうちの施薬院の所在はこの地とされる。寺の名称は聖徳太子が勝蔓経をここで講じたことに由来するとのこと。この寺の「愛染祭」は大阪三大夏祭の一つとして有名である。私は境内の「愛染かつら」に触って次へと向かう。

▽藤原家隆の墓

いま大きな五輪塔の下に眠る彼は鎌倉時代初期の歌人。藤原定家とともに「新古今集」の撰者となった人物で、高雅清澄の作風をもって知られている。

▽生国魂神社

「延喜式神名帳」に記録された式内社であるが、たびたび火災で現在は鉄筋造りとなっている。特徴のある生国魂造り社殿の確認に骨が折れた。大阪の上町台地夕陽丘の史跡をたどり、それぞれの歴史のあとをこの目で確かめ、大阪に疎い私としては望外の収穫があったと喜んでゐる。

古市古墳群と周辺の史跡めぐりII

坂井 邦典

二日目の九月五日、五時半起床。

この宿は中世の嶽山城跡という岳山（嶽山、標高二八一・六m）の頂上にあるので、宿の展望台から平田さんに説明してもらって四方の眺望を楽しんだ。朝食前に近隣の史跡を探訪するため早朝六時に出発。

☆楠公誕生地

永仁二年（一二九四）楠木正成がこの地（現千早赤阪村水分）に出生したといい、記念碑が立っていた。すぐ隣には千早赤坂村郷土資料館がある。楠公のことは三好さんが「備陽史探訪一八六号」に書いておられる。

☆建水分神社

延喜式内社で、天御中主神・瀬織津比売神・天水分神・水波乃売神・国水分神を祀り、社伝では崇神五年の創建という。その後、後醍醐天皇の勅命により、楠木正成が建武元年（一三三四）現在地に再建した。

☆金山古墳

瓢箪形の双円墳で珍しい。この墳形は新羅に多いという。芝生を貼っ

てきれいに整備してある。

北の円丘は直径三〇・九m、南は四四・八m。北側に横穴式石室があり、柵を乗り越えて覗いて見ると家形石棺が二基あった。六世紀末から七世紀初頭の築造で、渡来人との関わりがあるものと考えられている。

☆弘川寺・西行墓

真言宗、山号は竜池山。天智四年（六六五）、役行者の創建と伝える。後鳥羽天皇より「善成寺」の勅額をいただいている。戦国時代の兵火で焼失し、現在の伽藍は江戸時代の再建である。「願わくば花の許にて春死なむ」

その二月の望月の頃

の辞世を残して建久元年（一一九〇）、七三才で死去した西行法師の墓（土饅頭）は、本堂裏の丘陵を少し登った平坦地にあった。また、この寺の住職であった似雲法師（西行法師の研究をして墓を見付けた）の墓が向かい合って立っていた。

以前から西行法師がどこで死んだかその場所が知りたいと思っていたので判明して満足だ。今度は桜が満開の時に来てみたい。「かんぱの宿」に帰って、朝食をすませて再び出発。

☆龍泉寺

古義真言宗高野山派、山号は牛頭山。宿から下ったすぐの坂道の途中にある。推古二年（五九四）、蘇我馬子の建立と伝えられ、弘法大師が中興されたといわれる。

☆龍泉寺

古義真言宗高野山派、山号は牛頭

山。宿から下ったすぐの坂道の途中にある。推古二年（五九四）、蘇我馬子の建立と伝えられ、弘法大師が中興されたといわれる。

同じ境内に成口神社（延喜式内社、牛頭天王社）という神社と共存している。ともに南北朝の兵火で焼失し、仁王門（重文、鎌倉中期）以外は江戸期の再建である。神社の祭神は神八井耳命である。

汚い小さい蓮池のある庭園は国指定名勝とあり、拝観料三百円もつたのにもかかわらず、庭は荒れていて手入れをやっていない。この寺の住職の手抜きは目に余る。

ここを出発して間もなくすると街の中に白い塔が見えてきた。「平和の大塔」という名が付いているPL教団のシンボルである。

☆道明寺天満宮・土師神社
祭神は菅原道真・天徳日命・覚寿尼である。周辺は「土師の里遺跡」といわれる土師部の工人たちの本拠地であった。

ここで河内の土師氏について簡単に説明したい。

【日本書紀】によると、垂仁天皇の皇后の日葉酢姫命が亡くなられた時に、野見宿禰が殉死の代わりに埴輪を立てることを献策した。これが採用されてその功により「土師」の姓

を賜わった。そして当地を所領として与えられ、子々孫々この地に住んだという。

【続日本紀】によると、奈良時代に改姓を願ひ出て、菅原・秋篠・大枝（大江）・百集女のいわゆる「土師の四腹」に分かれ、その一族の中から菅原道真が出たのである。

道真は左大臣藤原時平の陰謀により、大宰府へ権帥として流される時、土師寺に住む伯母覚寿尼と涙の別れをして筑紫へ下って行った。

道明寺天満宮は道真の死後、その怨霊を恐れた村上天皇が、元暦元年（九四七）に伯母覚寿尼が住した土師寺内に、道真を主祭神とする社殿を新築された。戦国時代に兵火で焼失したが、織田信長が再建した。

☆道明寺（蓮土山、真言宗の尼寺）
昔は同じ敷地内にあったが、明治の神仏分離令により、約一〇〇m離れた現在地にある。土師氏の氏寺として推古二年（五九四）、土師連八島が創建したという。土師寺を道明寺天満宮が造られた時に道明寺と改名した。本堂には菅原道真作と伝えられる藤原時代初期の十一面観音像（国宝）がある。現在このお寺は四人の尼さんが守っている。

☆仲津山古墳
（応神天皇皇后仲姫命仲津山陵）

墳丘全長二九〇mの前方後円墳。全国で八番目の大きさである。出土した円筒埴輪の特徴は津堂城山古墳よりも新しく、誉田御廟山古墳よりも古いと判断されている。したがって、この墳は五世紀前半に築造されたと考えられている。

☆古室山(栗塚)古墳

仲津山陵と道をへだててある。墳丘全長一六六mの前方後円墳で、周濠は完全に埋め立てられて家が建ったところがある。また、この古墳は大坂夏の陣で豊臣方の真田大助が本陣をおいた所という。

墳頂には板状の石材が散在するの
で、堅穴式石槨の可能性が有る。出土した埴輪から、仲津山古墳と同時に造営され始めたが、古室山の方が先に完成したと考えられている。墳丘へは自由に上れるので、周囲の眺望を楽しんで埴輪の破片を採取した。

☆伴林氏神社

祭神は高御産巢日神・天押日命・道臣命・春日大神である。この神々は
大伴連の遠祖の神である。

大伴氏は旅人、家持など万葉歌人を輩出して有名。子孫の大納言伴善男が応天門の変(貞観八年「八六六」)で失脚し、伊豆に流されてから一族の力が急に衰えたのである。清和天皇の貞観九年(八六七)の

創建と伝えられ、道臣命を祀っている。西の靖国神社として府社に昇格した。いまは鉄筋コンクリート造りの神社に建て替えられている。また、この神社の境内は大伴系の林連が建立した拜志廃寺跡といわれる。

☆市野山古墳

(允恭天皇恵我長野北陵)

墳丘全長二三〇mの前方後円墳で、墓山古墳や茨木市の太田茶臼山古墳(継体天皇陵)と極めてよく似た規模とプランで築造されている。円筒埴輪の特徴から、誉田御廟山古墳に後続し、岡ミサンザイ古墳に先行する五世紀中葉から後葉に位置付けられている。

☆志真泉主神社

延喜式内大社で河内総社である。小さな境内と建物で、そんな社格の神社には見えない。

この地は神武天皇の長子、神八井耳命を始祖とする志紀泉主一族の領地であった。祭神は神八井耳命、天照大神その他十神である。

「古事記」の雄略天皇の条には、志幾の大県主が天皇の御舎の屋根にか置いてはいけぬ堅魚木を自宅屋上に置き、天皇が怒って家を焼こうとしたところ、白犬を献じて許してもらったという話が載っている。この神社のあたり一帯は十数回の

発掘調査の結果、旧石器・縄文・弥生の各遺跡はもちろんのこと、神社祭祀・飛鳥時代寺院跡・河内国府跡などが発見され、一大複合遺跡であることが判明した。目下史跡公園化の計画が進行中とのこと。移転費用はどれぐらい貰えるだろうか気になる。ところが下司のかんぐりである。

☆鉢伏山西峰古墳

この古墳は羽曳野市の河内飛鳥千塚古墳群に属している。鉢伏山という小高い丘の頂上の「はびきの霊園」の中にあつた。

石室の長さ二・七m、羨道より玄室が小さいいわゆる横口式石槨といわれるものである。墳形は方墳で、終末期(七世紀中葉)の築造である。この古墳は本格的に発掘調査され、その知見が全国の終末期古墳の基準的資料となっている。

☆観音塚古墳

鉢伏山の向かいの丘の上の整備されたコンクリートの急な階段をぶつぶつ吹きながら上った所にあつた。この古墳も終末期の横口式石槨をもち、石室の前室と玄室が石英安山岩製の切石で造つてあつた。その表面は丁寧にきれいに磨かれている。このあたり一帯は見渡す限りぶどう畑であつた。

☆飛鳥戸神社

「延喜式」神名帳の名神大社である。雄略朝に渡来伝承をもつ百濟系飛鳥戸造の一族の祖神である飛鳥大神(百濟の琨支君)を祀っている。

社格は日本最高位であるが、社殿と敷地は日本最小級であつた。氏子が少数で貧乏なのでこんな小屋のような社しか建てられなかつたのだろう。しかし、ぶどうで大もうけをして大きな神社に建て替わるもの時期待っている。

☆春日日向山古墳(用明陵磯長原陵)

東西六五m、南北五五mの方墳である。周囲に幅六mの空濠がある。用明天皇は聖德太子の父帝である。

☆観福寺・推古天皇太子聖德太子磯長墓(観福寺北古墳・上城古墳)

寺伝によると推古二八年(六二〇)、聖德太子自ら人夫を督励して横穴式石室の墓所(円墳)を造営したが、推古二九年(六二二)に生母の穴穗部間人皇后が死去されたので、まず墓の奥に石槨で葬った。ところが、翌推古三〇年(六二二)に太子(四九才)と妃の膳手姫が同時に死去されたので、母の石棺の手前に乾漆棺(夾紵棺)を横に並べて追葬し、いわゆる三骨一廟の聖德太子磯長墓になったという。その後、時の女帝推古天皇が太子追福のため陵墓の南

側に建てたのが叡福寺の起源であり、当初は御廟寺・石川寺・磯長寺とも称したという。

南北朝時代に高師泰軍の兵火、戦国末期には織田信長の兵火で全焼した。慶長八年(一六〇三)、豊臣秀頼による太子殿(重文)の再建をはじめとして多宝塔・金堂・大師堂などが次々と再建された。

叡福寺の山門(西側の仁王は鎌倉時代の作)を入ると、真正面に二層の唐破風の屋根をもった建物がまぎれ目に入る。これは太子陵である横穴式石室への入口に建ててあるのだ。建物の左に沿って山に入って太子陵の円墳(楕円形)を一巡した。

以前から聖徳太子の陵へ参拝するのが念願であったから目的を果たして満足をした次第。なお「聖徳太子」は実在しなかった(?)という説がある。備陽史探訪九〇号の柿本さんの文章をご一読を。

また、叡福寺の境内には松井塚古墳の横口式家形石棺が展示してあった。仏陀寺(後出)から西方へ約六〇mのところの松井氏の庭にある古墳なのでこの名前がついている。

☆山田高塚古墳

(推古天皇磯長山田陵・敏達天皇皇子竹田皇子墓)

一辺五八mの方墳で、推古天皇陵

に治定されている。この墓は初め竹田皇子の墓として営まれ、推古天皇が逝去された時、遺勅により追葬されたと伝えられる。江戸期の文書によると、石室内部の向かって右は推古天皇、左は竹田皇子という。

☆仏陀寺古墳(蘇我倉山田石川麻呂)

小さなお寺である盛光山仏陀寺(真言宗)の境内に横口式くり抜き形石棺がある。盛土はほとんどなくなっているが、一辺約二〇mと推定される方墳である。石棺の外部は見えるが、石棺内部は埋もれていて見ることができない。

この古墳は石川麿が葬られているという。この人は蘇我馬子の孫であり、中大兄皇子が中臣鎌足らと蘇我入鹿を斬殺した時に上表文を朗読する役をしたのである。その後、蘇我日向の密告を信じた中大兄皇子によつて謀反人として追われ、飛鳥の山田寺において自殺した。しかし事実は蘇我一族を破滅させ、勢力を縮めることに成功した中大兄皇子の陰謀ではなかったか。

この寺の境内に親鸞上人腰掛岩というものがあつた。腰掛の形をした石である。格好の石を見つけたものだ。お寺だから上人の名前を使えばよいと気付いた頭のよい坊さんである。弘法大師でないのがよい。

☆近つ飛鳥博物館

大阪府河南町のど田舎に、安藤忠雄氏設計の度肝を抜く変わった形の大阪府立近つ飛鳥博物館がある。仁徳陵古墳の一五〇分の一の模型をはじめ、府下の古墳から出土した埴輪・土器・剣・武器・玉などが多数展示してある。あの三ツ塚古墳出土の修羅の本物もあつた。竪穴式石室・横穴式石室の模型・古墳の作り方・埴輪の作り方のビデオなどもあり、古代史の勉強ができた。

博物館一帯には六ないし七世紀ころの円墳が約六〇〇基もある。一須賀古墳群という大群集墳である。蘇我氏の系譜は、蘇我石川宿禰↓満智宿禰↓韓子宿禰↓高麗宿禰↓稲目と続く。その次の馬子の時、ライバルの物部守屋を滅ぼして政治の実権を握り、大和飛鳥の地に蘇我系飛鳥王朝を作り上げた。そして一須賀古墳群を形成したのであつた。

この古墳群に北接する磯長谷は、「王家の谷」と呼ばれ、蘇我氏と深い関係にあつた敏達・用明・推古・孝徳天皇や聖徳太子の陵墓伝承地が点在している。

聖徳太子が華々しく政治の世界に登場し、大活躍したのに突然の死。おそらく蘇我馬子に毒殺されたのだろうが、その理由が長い間わからな

いでいた。しかし、これは聖徳太子が十七条憲法を作り、天皇親政をもくろんだことが、馬子の権力を行使するのに障害となつてきたからであることが判つて氷解したのであつた。

☆通法寺跡、源氏三代の墓

通法寺は長久四年(一〇四六)、河内源氏の祖頼信・頼義が氏寺として創建した。その後たびたびの兵火で焼失した。元禄一三年(一七〇〇)、徳川綱吉の命により僧隆光、柳沢吉保により再建された。ところが、明治初期に廃寺となり、現在は小さな山門だけが残っている。墓地には源頼信・頼義・義家の三代の墓があるというが、時間がなく自動車を止めて見学しただけであつた。

☆壺井八幡宮、壺井神社

源頼義が康平七年(一〇六四)に石清水八幡宮を私庭に勧請したのが起源である。同じ敷地に建っている向かつて右が壺井八幡宮、左が壺井権現正一位と書いてある社である。両者とも兵火により焼失し、元禄一四年に通法寺とともに再建された。

一七時四〇分、出発。
二一時四〇分、一同恙無く帰福。

早朝より夜まで都会の狭い迷路から高速道を休み無く運転と、ご案内をいただいた平田さん、平川さん心より深謝したい。

宇治と春日若宮おん祭への旅

牧平 悦美

江戸時代に発見。大化二年〔六四六〕に宇治川に初めて架橋され、境内にその姿をとどめています。

▼宇治神社

平等院の対岸に鎮まっています。応神天皇の離宮跡と伝え、仁徳天皇と皇位を譲り合ったとされる菟道稚郎子を祀っています。

▼宇治上神社

宇治神社の北東にあり、応神天皇・仁徳天皇・菟道稚郎子を祀っています。本殿・拝殿ともに国宝。優美な姿の建物で、世界遺産にも指定されています。背後に奥深く広がる森はさらに荘厳さを加味しています。

▼宇治市歴史資料館

宇治上神社・平等院世界遺産登録五周年記念企画展を開催中でした。

▼芭蕉塚古墳

五世紀後半の前方後円墳。全長一〇メートル。全体が竹藪化していました。

▼久津川車塚古墳

芭蕉塚よりも大きな前方後円墳で、全長は一八〇メートルもあります。残念なことに後円部墳丘が大きく破壊されています。

▼両古墳ともに城陽市北端、宇治市と接する地に位置し、鍛冶塚古墳・青塚古墳・丸塚古墳などとともに久

津川古墳群を形成しています。久津川車塚を見学するとあたりは急激に暗くなり、宿舎の「かんぼの宿奈良」に向かいました。

▼おん祭遷幸の儀

六時半に夕食をとったあと、深夜の外出に備えて一時過ぎまで休憩をとりました。今回の旅の最大の目的は、おん祭の一連の儀式のうち、若宮から御旅所まで御神霊が遷される遷幸の儀を見ることなのです。

おん祭は、保延二年（一一三六）に

関白藤原忠通が五穀豊穰・国家安寧を祈願して、大和一国をあげて齋行したのが始まりで、以後、八九四年間続く伝統ある祭です。

夜一時半、車二台で春日大社へ。

夕方バラバラと降った雨は止み、星が二つ三つきらめいています。車から降りて二の鳥居の方角へ。懐中電灯のあかりを頼りに歩いていると、「消してください。携帯電話の電源も切ってください」と注意を受けました。遷幸の儀は暗闇の中で齋行されるのを思い出しました。生い茂る大木で星明かりさえもさざざられて真つ暗闇です。少しして目が慣れてくると、参道の両側に人々が立ち並んでいるのが見え、私たちが続くうち、遠くで太鼓の音が響きました。参道の清めのためでしょうか、二つの大松明がゆっくりと地面を擦りながらやって来ました。いよいよ御神霊の御旅所への遷幸が始まったのです。参道に落ちた大松明の名残火が燃え殻になるころ

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きが聞こえはじめました。不思議な音です。獣の唸り声のようにも感じられ、とても人間のものとは思えませんでした。ほんとうに若宮の神様の声なのかもしれません。やがて白装束の一塊が見え始めました。十数人の神職が頭上に御神霊をいただいているのです。神の枝を手にかざして口には紙の覆いをしています。

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きは次第に大きくなり、目前に迫ってきます。そのとき私は、確かに何か特別な存在が参道を下ってくるのを感じました。

行列が自分の前に来ると、待っていた人々は次々に拍手拝礼をしてくれます。拝礼が波のように押し寄せてきて私の番になりました。拝礼をして頭を上げた途端、なんと形容してよいのでしょうか。えもいえない不思議なお香の匂いがただよい、そして通り過ぎていったのです。

その後、神職の方々・巫女・慶雲

が響きました。参道の清めのためでしょうか、二つの大松明がゆっくりと地面を擦りながらやって来ました。いよいよ御神霊の御旅所への遷幸が始まったのです。参道に落ちた大松明の名残火が燃え殻になるころ

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きが聞こえはじめました。不思議な音です。獣の唸り声のようにも感じられ、とても人間のものとは思えませんでした。ほんとうに若宮の神様の声なのかもしれません。やがて白装束の一塊が見え始めました。十数人の神職が頭上に御神霊をいただいているのです。神の枝を手にかざして口には紙の覆いをしています。

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きは次第に大きくなり、目前に迫ってきます。そのとき私は、確かに何か特別な存在が参道を下ってくるのを感じました。

行列が自分の前に来ると、待っていた人々は次々に拍手拝礼をしてくれます。拝礼が波のように押し寄せてきて私の番になりました。拝礼をして頭を上げた途端、なんと形容してよいのでしょうか。えもいえない不思議なお香の匂いがただよい、そして通り過ぎていったのです。

その後、神職の方々・巫女・慶雲

が響きました。参道の清めのためでしょうか、二つの大松明がゆっくりと地面を擦りながらやって来ました。いよいよ御神霊の御旅所への遷幸が始まったのです。参道に落ちた大松明の名残火が燃え殻になるころ

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きが聞こえはじめました。不思議な音です。獣の唸り声のようにも感じられ、とても人間のものとは思えませんでした。ほんとうに若宮の神様の声なのかもしれません。やがて白装束の一塊が見え始めました。十数人の神職が頭上に御神霊をいただいているのです。神の枝を手にかざして口には紙の覆いをしています。

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きは次第に大きくなり、目前に迫ってきます。そのとき私は、確かに何か特別な存在が参道を下ってくるのを感じました。

行列が自分の前に来ると、待っていた人々は次々に拍手拝礼をしてくれます。拝礼が波のように押し寄せてきて私の番になりました。拝礼をして頭を上げた途端、なんと形容してよいのでしょうか。えもいえない不思議なお香の匂いがただよい、そして通り過ぎていったのです。

その後、神職の方々・巫女・慶雲

が響きました。参道の清めのためでしょうか、二つの大松明がゆっくりと地面を擦りながらやって来ました。いよいよ御神霊の御旅所への遷幸が始まったのです。参道に落ちた大松明の名残火が燃え殻になるころ

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きが聞こえはじめました。不思議な音です。獣の唸り声のようにも感じられ、とても人間のものとは思えませんでした。ほんとうに若宮の神様の声なのかもしれません。やがて白装束の一塊が見え始めました。十数人の神職が頭上に御神霊をいただいているのです。神の枝を手にかざして口には紙の覆いをしています。

「ヤー、ヤー、ヤー」

という響きは次第に大きくなり、目前に迫ってきます。そのとき私は、確かに何か特別な存在が参道を下ってくるのを感じました。

行列が自分の前に来ると、待っていた人々は次々に拍手拝礼をしてくれます。拝礼が波のように押し寄せてきて私の番になりました。拝礼をして頭を上げた途端、なんと形容してよいのでしょうか。えもいえない不思議なお香の匂いがただよい、そして通り過ぎていったのです。

その後、神職の方々・巫女・慶雲

▼放生院橋寺
宇治橋断碑（日本三古碑の一つで、

現存する鳳凰堂のことです。

▼世界遺産朝日山平等院
永承七年（一〇五二）、藤原頼通が父道長の別荘を改めて寺院にして平等院と名付けました。仏師定朝作の奇木漆箔造りの阿弥陀如来像（国宝）を安置した阿弥陀堂（国宝）が、

式内大社。大化元年（六四五）の創建で、壬申の乱の前に大海人皇子が戦勝祈願したと伝えられています。

▼黄檗山萬福寺
日本三禅宗の一つ、黄檗宗の大本山で、江戸時代初期、鎖国時代に中国から来日された隠元禪師が開山。天王殿の弥勒菩薩は布袋様です。

▼許波多神社
式内大社。大化元年（六四五）の創建で、壬申の乱の前に大海人皇子が戦勝祈願したと伝えられています。

▼宇治市歴史資料館
宇治上神社・平等院世界遺産登録五周年記念企画展を開催中でした。

▼久津川車塚古墳
芭蕉塚よりも大きな前方後円墳で、全長は一八〇メートルもあります。残念なことに後円部墳丘が大きく破壊されています。

楽を奏でながら進む楽人たち、そして参拝の人々の行列が続き、私たち八人も横に並んではぐれないように手をつないでその列に加わりました。参道の左右には大勢の人々が静かに立って待っています。中でも若い女性が多いのが印象に残りました。

御旅所に着くと、御神体を行宮に遷す儀式はすでに始まっており、荘厳な雰囲気はただよっています。しばらくして「点火！」の合図で篝火に火がついて明るくなりました。

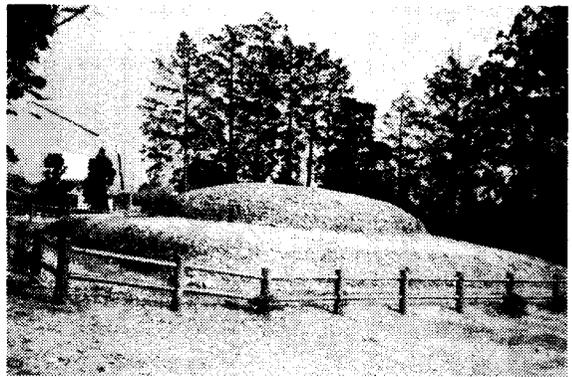
正面の一段高い所に行宮があり、植松が立てられ、その前に小高く芝舞台、少し距離をおいて二つの美しい鼈太鼓が据えてあります。雅楽が奏でられ、暁祭がおごそかに始まり、神前に海川山野の神饌が献じられていきます。

一時間ほど見学して午前二時、宿に帰りました。

翌一七日は、宿舎のすぐ近くにある平城京跡の朱雀門の見学から始まりました。

▼石のカラト古墳

この古墳は平城ニュータウンの奈良市神功町と京都府木津町兜台の境の丘上にある終末期古墳です。人頭大の石で全面を葺いてある上円下方墳で、「カラト」の名は石室（横穴式石槨）が唐櫃に似ていることから



石のカラト古墳全景 見事な上円下方墳です。

ついたものです。ただし、いまは石室を見ることはできません。

▼浄瑠璃寺

庭園(国史跡・国特別名勝)の東に建つ朱塗りの三重塔(国宝)は周囲の木々の緑に映えて美しく、九体阿弥陀仏(国宝)が安置される本堂(国宝)は、静寂の中、あたかも阿字池に浮いているかのようです。

▼岩船寺

山門の前に僧たちが使ったと伝えられる石製浴槽(岩船)があるところから寺号がついたといえます。鎌倉時代の十三重石塔の後に、室町時代の三重塔(ともに国重文)が

あり、侘びたたたずまいで風格がありました。

浄瑠璃寺・岩船寺は当尾(塔尾)と呼ばれる所にあります。奈良市に隣接する地域で、京都府相楽郡加茂町の南部です。ここから山道を南下し、国道三六九号線を下っていくと、左前方に東大寺の麓、その上に鴟尾が金色に光って見えました。

▼おん祭お渡り式

奈文研平城宮跡資料館に車を止め、西大寺から近鉄で奈良市街へ向かいました。駅を出て混雑する人波に流されながら三条通りを目指しました。それにしてもすごい人です(新聞報道では二〇万人)。興福寺の南円堂と五重塔の中間にある石段の上でようやく場所を確保でき、時代行列を見ることができました。

番外列が始まったところで、一番の日使から巫女・細男・猿楽・田楽・馬丁児・競馬と続いています。

馬上にある人の姿は衣冠束帯で、冠に桜の花、あるいは藤の花の造り花を挿し、お供が従います。

巫女は頭上から被衣をつけ、衣裳も藤の花柄です。あちこちに藤の花が見られるのは、興福寺も春日大社も藤原氏の寺社だからでしょう。

まるで平安絵巻を見ているような行列は、流鏝馬・将馬・野太刀・大

和士として最後に江戸時代の大名行列へと続きます。

行列が終わって人波がややひいたころ、猿沢池の横を通って次の目的地まで歩きました。

▼元興寺極楽坊

和銅三年(七一〇)、平城遷都に伴い、飛鳥から法興寺(飛鳥寺)を移し、寺名を元興寺と改めました。南都七大寺として栄えましたが、平安後期以後は庶民信仰に支えられ、法灯を維持しました。現在も本堂・禅堂(ともに国宝)の西流れの屋根には飛鳥寺の瓦が使われています。

収蔵庫の前には、古墳の石棺のふた石を手水鉢として置いてあります。庫内には阿弥陀如来座像・聖徳太子立像が安置されています。五重小塔は細密に造られた模型で、国宝に指定されています。二階の一室には、珍しい納骨塔婆や千体仏、こけら経が展示してありました。

二月一日に行われた戸田和吉先生の特別講演のテーマ、尾ノ上古墳から出土した「き鳳鏡」は、このお寺の生駒研究所で保存処理中とのことです。

近鉄奈良駅まで上ツ道(この道を南にたどれば藤原京)を歩いて、電車で平城宮跡資料館に向かい、一時間ほど見学して帰途につきました。

感覚的旅行者宣言

松井 奈穂

それはモーセの「契約の箱」が埋められているという剣山行きの計画中のことでした。その気で再度宇野正美氏（日本・ユダヤ同祖説提唱者）の講演テープを聴き直したり、旅のしおり（われわれの旅はこの準備から入る）をまとめ、Yさんについてしまいました。

「ごめん、やっぱり奈良に行きたい」
Yさんは怒った様子もなく
「そうしようか」
とあっさりしたもの。それと同時にふわっと温かいものが、こみ上げました。

「ああ奈良に行ける。過去三回も訪れ、そのたびに奈良の魅力に引き込まれ、もう最も親しみのもてる土地になってしまっている奈良へ」
かくして「美女二人大和路の旅 part 4」へと計画が切り替わったのでした。

思い返せば、part 1は飛鳥と斑鳩、このときはとにかく「太子さま」という感じで、ひたすら心には聖徳太子様がいらっしやいました。いまNHKで放映中の朝のドラマ「あすか」に出てくる道をサイクリ

ングしました。

part 2は卑弥呼を求め、箸墓を訪ね、ミステリアスな崇神天皇の出自に興味津々、うっそうとした山辺の道を雨の中、半分意地で歩き、茶店のラムネのぬるさが妙にひっかかったのを覚えています。雨の中の石上神宮はすばらしく荘厳でした。

こうくるとpart 3は必然的に？天照大神へとつながっていくのです。もう一度と思い立ち、再度笠縫邑の檜原神社（崇神天皇の娘、豊鍬入姫によって天照大神が宮殿より遷され祀られた）に寄り、また鏡作座天照御魂神社に参拝しました。

この辺から天照大神を求めての旅が始まりました。途中いろいろ神社仏閣を訪ねましたが、引きつけられるのは、古代より祀られ、皆が手を合わせて祈ったであろう太陽神アマテラスなのです。母方が神道であり、祖母からは藤原氏の系統だと聞かされているためか、神様の方にとっても関心があるのです。

余談になりますが、最近、葉室頼昭氏（春日大社宮司）の神道シリーズにはまってしまい（皆様もぜひご一読ください）、このたびは春日大社も入れたプランにしたのです。

さて、前置きがやたら長くなりましたが、part 4は天照大神を

追つての旅を思い出してみようと思います。

十月三日の朝、八時の新幹線に乗り京都、そして奈良へ。何度も奈良に来ていながら訪れてなかった博物館、芸術作品としてのすばらしさを感じながらゆったりと歩きました。ただ知識のない私には学生ボランティアの説明にうなずくのが精一杯でした。

ここでこのままお目当ての春日大社に直行すればよかったです。が、依水園の中のお座敷「三秀」で、麦とろ御膳千円也をいただいて当初の予定通りUターン、今回の失敗行動である「観光バスに乗ってしまう」という行為をしてしまいました。私たちのように感覚的旅行者（知識はないが、とにかく何かを感じようとする）にはとつても無駄な時間になってしまいました。もう少し丁寧な計画が必要でした。

興福寺や東大寺を分刻みで歩き、新米ガイドさんのたどたどしい話にもあまり興味がわかず、ゆったりと過ごしたかった春日大社もすらつたと一通り感じて。

「あー大失敗、二度と観光バスには乗らないぞ」

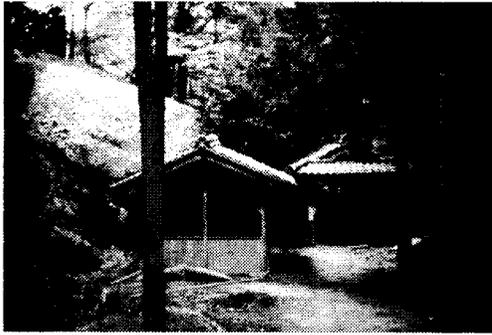
と心に決めました。ただいつもアウトロー的な旅でしたので普通に

やってみたかったです。誰がいったか「型にはまり型を破る」でしょうか。

それからいつものお楽しみ、小物やお土産を心ゆくまで見て歩きました。来るたびに奈良絵の器を少しずつ増やしているYさんの目のなんと輝いていたことか！とつぷりと日が暮れて、ライトアップされた平城京朱雀門を横目に、美味しいビールを待つお宿に到着、明日こそは感覚的旅行者の汚名返上！といきまいて、カンパニーを何度も繰り返し返したのでした。

次の朝、抜けるような初秋の青空「何だかすばらしい日の予感♥」

ところが、チョー現実的行動、売店で柿の奈良漬（これはとつても評判のいいお土産みたいです。安いにし）をしこたま買い込むYさん。それを急ぎ立て、駅前の日本レンタカーへ直行。手頃な車種はなく、まるで営業にでも出かけるいで立ちにてカローラバンの女二人連れ。やつとやつと今回の旅のメイン「柳生街道」へいざ出発とあいなつたわけがあります。巧みなナビゲーションにて何度となく後先し、お目当ての天乃石立神社（天照大神関係の式内社）は近くまで無理やり突っ込んだせいか、やつと通れる急勾配。



天乃石立神社社殿

でもです。来た甲斐がありました。昨日のことは今日の感動のためにあったようです。どっしりと横たわる巨石にうっそうとした山の木々。その巨石に抱きついて瞑想してみました。少し先にある「二刀石」、柳生石舟斎がある夜、天狗を一刀両断にしたら翌朝この岩になっていったといえます。少し湿っぽく、昼なお暗い剣術の修練場。平たく丸い巨岩がほんとうに一直線に裂けています。

古代の人たちもきっとここで祈ったのだろうと全身で感じ、何ともいえない時間を過ごしました。畑仕事のおじさんには(もしいたなら)不気味に映ったことでしょう。Yさんとの会話も出ないほどでした。天の

岩戸隠れの神話のいい伝えもあるようですが、私たちにとつては、この巨石が古代よりここにあり、人々とずつと何らかの関係があったことが大切なのです。

Yさんは巨石のまわりの雑草を採集(現在も植木鉢にて成長中)しています。私は苦勞して車を回し、今度は茶畑で茶摘みを始めたYさんにあきれながら、

「もうここに来ることはないだろうな。夏に参った大江山の皇大神社(元伊勢といわれるアマテラスの巡行先)でも感動したけれど、しばらくは天照関係かたっぱしうて感じかな」

などとあれこれ思いにふけていました。この原稿を書いていると、あの時の茶摘みのお茶をYさんが入れてくれました。何とも素朴なありがたい味です。

帰り道で寄った山の中の「レイクフォレストリゾート(抜群の景色、関西一円の憩いランドって感じ)」でゆつたりとラーメンをすすりながら、さつきの異空間のことを話し合いました。——神って何だろう。自然を怖れ、自然に感謝することが神を祀る意味なのだろう。春日大社の葉室宮司が書かれています

「日本は世界でも最も自然に恵まれた国の一つ。山あり、川あり、海に

囲まれ、四季折々。この国の人達はただ自然に感謝して生きればよい」と。そして

「神とは自然、宇宙のきまりをつくっている存在だ。厳しい自然の中で発祥した他の色々な宗教とは全く違う世界がこの国にはある」と。

コスモス真っ盛り道の畑道、このルートを徒歩で巡る元氣な人達と挨拶を交わしながら、夜支布山口神社で記帳し、最後に浄瑠璃寺に立ち寄り、当尾の美女「吉祥天女像」に会いました。こうして柳生路をあとにしたのです。春日大社をもう一度ゆつくりと参拝したかったのですが、見送ることにしました。次は宮司のお話を聞けるときに計画できるといのですが。

帰りの新幹線、お疲れさまカンパイビルはほろ苦く、胸にキユンとしました。感覚的旅行者はあれこれの理屈ではなく、その地に赴き身体で感じようとするのです。

「見える人には見えるのです。それを感じる心さえもつければ♥」
という思いを持ち続けていきます。とはいえ知識の裏付けがなくては想像も広がっていきません。また勉強会の方へも参加していきたいと思っています。今後ともよろしくお願いたします。

第三回郷土史講座

鎌倉時代末期前後の福山の宗教

「水呑千軒皆法華」の言葉どおり水呑町は日蓮宗徒が多い地域です。この日蓮宗の水呑伝播の中心的な役割を果たしたのが水呑妙顕寺で、定説では、京都妙顕寺日像の弟子、妙実(大覚大僧正)が延文元年(一三五六)に開基したとされています。

実は、この寺には長らく秘されていた二幅の曼陀羅本尊があったのですが、昨年一月の水呑文化祭のとき初めて一般に公開されました。

この曼陀羅本尊のうち一幅の端書に「元亨三年(一三三三)三原妙性建立本願」とあり、曼陀羅本体には「日像」の花押が入っていたのです。まさに今までの定説を根底から覆す大発見でした。妙顕寺の創建が三十三年早まり、それも日像自身の意思によることのはっきりしたのです。今回の講座は、この新発見を中心に小林さんにお話しいただきます。

【実施要項】

〈講師〉小林定市さん

(城郭研究部会)

〈開催日〉三月二五日(土)

〈時間〉午後二時～午後四時

〈会場〉福山市立中央公民館

〈会費〉資料代として一〇〇円程度

アマテラスに誘われて

吉田 治美

昨秋、四度目の奈良への旅が実現し、「ああ、ここが本当に来たかったところだ」という感動の場所にめぐりあえた。柳生の里にある天乃石立神社。それまでに足を運んだ飛鳥の里も、斑鳩の里も、心の中からどんどん遠ざかっていくような感じ。太古からそこにあつただろう、重なり合う苔むした巨石たち。突如、実感として吹き寄せてくる悠久なる時の流れ。三十五億年前に地球上に生物が生まれ、それからずっとずっと生命が伝わってきているのだ。命が命を生み、それがくり返されてきて、この私も、視線の端で石に抱きついている相棒も、それぞれ一つの命を与えられて生きている。

私のこの命ですら、広大な宇宙の中ではほんの刹那のものだ。人の一生は長いと思っても、それは相対的なもの。この一時間、この一日、この一年……と比べれば、長いかもされない。それにしても、たかだか百年に過ぎない。ここにあるこの石たち、この木々を渡っていく風、この大地、この宇宙……いったいいつからここにあるのだろうと思いをはせていくと、私が漠然とながら古代史

から求めたいと思っているのは、こういう目に見えない感じ方であつたのだと思えてくる。

もっと早くに古代史とめぐりあつていれば……、たとえば十代の頃、せて二十代の頃。そうすればもっと柔らかい心で、もっと元氣いっぱい行動力でも本も読み、いろんな所へも行ったのに……ふと考える。しかしその頃は、古代史にふれる機会があつても、今ほどには心ひかれることはなかつたかもしれない。もっとキラキラした激しいものに、もっと現実的なものに、あの頃はひかれなにかがない。この年齢になつたからこそ古代史にひかれていく自分をどこかで楽しみながら、やつと「ゆつくりいゝ人生」のすばらしさに気づいた自分を嬉しく思いながら……。そして自分で選んだ古代史とゆつくり向かいあつてみたいと思つている。

という今までの定説はすでにくずれつつあるが……。

仕事、家庭の雑事、一歳と三歳の孫娘の相手といった普段の生活の忙しさから少しだけ離れて、全く異なつた世界に足を踏み出してみると、日常のわずらわしさから解き放たれて、心が自由に遊びはじめよう喜びを味わうことができる。心を自由にすると、いろいろなものが見えてく。日常の生活の中では見落としてしまふものばかり。そんなところに、旅の魅力があるのかもしれない。だからこそ、年齢とか忙しさとは関係なく、いつでもどこかに旅立てるだけのスタンバイだけはしておきたいものだと思つている。

古代史にふれる世界と、現実の日々の生活。その二つは何だかあまりに遠すぎて、まるで互いに異次元の世界のように思えたりする。それでも何十億年という天文学的な隔たりを越えて、この宇宙の時間と空間の下でつながっているという、そのゆるやかなネットワークの実感が、私というこの命の存在の確かさを教えてくれているような気がしてくる。さて、いろいろな思いが次々とあふれてきて、本題のアマテラスを忘れていた。二千年の幕開けの初

に猿山で拜んだ。暗かつた空がだんだんと白んでいき、やがて太陽が顔を出した時のあの得もいわれない感動。そして徐々に伝わってくる太陽のぬくもり。思わず太陽に向かつて両手を差し伸べたくなるような喜び。この自然にわきあがつてくるような気持ちは、きつと古代の人々も同じだつたのだろうと思う。何十億年も前の地球にも、太陽は今とかわらない光とぬくもりを投げかけていたにちがいない。古代の人々は、現代の私達より何倍も素直なきれいな心で、何よりも畏れをもつて、太陽の前にひれ伏していたにちがいない。

アマテラス信仰の原点が太陽信仰であることは、この身に太陽を浴びているだけでも心底から実感できる。古代人の太陽信仰は、伊勢神宮に天照大神が祀られる以前からあつたはずだ。それは農耕生活において、太陽こそすべての中心だつたはずだからだ。したがって、もともとの太陽神であつたアマテラスが天照大神にかわつたということは、大和朝廷が政権統一をすすめる過程において、それぞれの豪族が祀っていた太陽神を最終的に大和朝廷が独占したということではないのか、という学説がある。

その説によると、天照大神があえ

て伊勢に鎮座しなければならなかった理由は、この伊勢地方には古代からローカルな太陽崇拜信仰があったからだと。太陽崇拜の基本は、曙光の日の出を仰ぐこと。それには海からの日の出が最も美しい場所でないければならない。古代王国の中心地である大和は、山に囲まれた盆地である。太陽の神の鎮座する場所としてはふさわしくなかった。そのため伊勢に移ったのだという説だ。

こういう視点からの勉強はまだまだ浅くて、これからいろいろと本を読んできたいと思っている。だから今回おこがましく「アマテラスに誘われて」などと題をつけたのも恥ずかしい限りだ。これはいつてみれば、プロローグ。これから勉強をしようと思っと思っていますという宣言だと受け取ってもらえたらうれしい。

「古事記」に出てくる天照大神の誕生や天の岩戸の話。天照大神が皇室の祖神となったのはいつか。もとのアマテラス神は女性ではなかったのではないか。もとの太陽神である「太陽神」とは誰のことか。もしかして、アマテラスこそ卑弥呼ではないのか……、糸口はいろいろある。とにかくアマテラスに心を誘われてみよう。

続編、ご期待の程を！

初冬の奈良路

石井 しおり

紅葉散り敷く十一月二十七日朝、始発大阪行きバスで福山駅前を出発。いよいよこれからお馴染み七人衆の生駒・佐保・佐紀路の旅が始まった。まず登山電車「ゆめいこま」で漫画の描かれた車輦に乗り宝山寺駅へ着く。参道の両側は鬱蒼とした杉木立、石灯籠の献灯がびっしり並び、霊気漲る宝山寺境内である。

宝山寺は別名「生駒聖天さん」とも呼ばれ、商売・福運に御利益があるありがたい山である。本堂に寛文十年（一六七〇）ころ湛海の刻んだ不動明王像・五大明王像があり、役小角が修行したという岩窟があった。勅願寺である。

なだらかな参道は足にやさしく低い石段で、境内を遠望しながら降りられる。とある食事処「カルメシ茶屋」にて昼食。献立はユバ入りすまし汁、寄せ豆腐、若鶏どんぶり、煮こぶで、山冷えの体に熱いユバのすまし汁が美味しかった。

靴紐を締め直して興福寺へ。猿沢の池、枝垂れ柳、五重塔、南円堂、北円堂、緑の草に遊ぶ鹿、紅葉の三桎の木の鮮やかさ。東金堂の右に緩や

かな三笠山が見え、絵葉書のような情景である。

国宝館に入り、その名も高き阿修羅像の前で、釘付けにされる。天平六年（七三四）生まれの少年の面差しの彼は胸いっぱい溢れる思惟が今にも発露しそうであった。生まれより一二六五年間、たおやかな細い体は何を思い続けてきたのであるうか。

その他平安時代作、木造十二神将像、鎌倉時代の天燈鬼などがあつた。感動を引き摺りながら東大寺へ。

どっしりと存在感のある築地の土塚、黄櫨の紅葉、辺りを明るくして立つ銀杏の黄金色、松の老木、鹿、手向山を望みつつ東大寺戒壇院跡の礎石を見ていると、聖武帝の天平時代（七五〇年頃）が清澄な空気中から甦ってくる。

さらに二月堂・修二会の三月堂は、登る石の階に波状・亀甲状線刻があつて、海と山を結んだ世界を表現して修業に励んだものであろう。

十一面観音秘仏・万燈も仏法を照らす。やがて奈良盆地は次第に暮れなずみ、冬柿の紅が夕陽に照る。

七人衆のお泊まりは近くの「ペンション奈良倶楽部」。旅装を解く二階の窓から大仏殿屋根の鴟尾がどっしりと見え、宵の淡い月が甍に立つ。

夕食メニュー、バラに象ったサーモン、蕪のスープ、自身魚の奉書蒸し・しめじ添え、牛ヒレのミディアムステーキ、デザートはシナモン入りパンプキンケーキに紅茶がコーヒィ、ビールとワイン、ごはんがおいしくて「これは小錦ですか」とつい聞いたものだから「いえコシヒカリです」の答えて、笑われてしまった。剃り立ての口髭にエプロン掛けの主を先頭に、心こもったサービスだ。

旅の夜半を天平クラブのカラオケで慰める。「サザンカの宿」「アカシアの雨が止むとき」などエトランゼの哀愁が古都にさまよう。朝起きると、奈良の森を通り抜けてくる風が清々しい。柳生庄に近いのか、お向かいに「〇〇流檜道場」の板が掲げられていた。

次はコスモス咲く般若寺へ。本堂で（重文）文殊菩薩獅子騎乗像、護良親王が吉野へ逃れる途中、身を潜めたという唐櫃、意外な小ささに落魄を思いつつ十三重石塔などを拝観。般若寺を後に行く彼方に、恐ろしく高い赤煉瓦の塀に囲まれた、奈良少年刑務所が見え始める。モダンな様式建築と大きさ、清潔な周辺、森のある平和な空気が漂う。他県ナンバーの車が次々に到着し、面を伏せて面会に急ぐ人たちらに出逢った。今

日は日曜日なのだ。心が裂かれる。次の不退寺は有名な在原中將業平の寺である。平安の前期、平城天皇の子、阿保親王の五男として生まれた彼は、祖父の讓位後、三代同居してこの屋敷に生まれたという。

本尊の業平像は、色目豊満な立像で美男ぶりが惚ばれた。五大明王像、五世紀頃の石棺が苔むす庭にある。少し荒れた庭に南天、千両、萩、美男かずらがさわさわと揺れて色めく。

海龍王寺では、室内に安置された奈良時代作の国宝木質、高さ四・一mの五重小塔があり、緻密さに驚く。続く法華寺は、天平十三年(七四一)聖武天皇の詔により総国分尼寺として創建された。光明皇后はまじしい人達を入浴させ、自らその垢を流したと伝えられる。その深い木立の中に小さな庵があり、滝口入道との恋に破れた侍女横笛が住んだ苦屋だとの伝承がある。

さらに佐紀路を進み、縦横一四〇〇mに及ぶ平城京跡地に立つ。はるか彼方に再建の朱雀大門が堂々と立ち、大極殿・各省・内裏の遺構が記してあった。さぞかしの威容である。このあとタクシーで秋篠寺へ。市内にありずっと渋滞したが、一步寺内に入ると古風な庭、奈良建築の本堂の佇まいが静寂そのもの。愛染明

王・帝釈天・不動明王・十二神像など、とくに技芸天は人間味を湛えた魅き込まれるような微笑みであった。次の西大寺も東大寺と同じ天平時代、同規模発足の大寺院で、幾世を経る間に寺運の差が生じたといわれる。広大な境内に寂韻を感じた。増長天が踏む邪鬼は創建の天平以来、岩に刻まれて堂内にうづくまる鬼である。

古都巡りを満喫して帰路については三時過ぎ、楽しく疲れを知らぬ佐保・佐紀路であった。

われわれの魂のルートに出逢ったような旅、そんな心に残る旅であった。平成十一年十一月末日

新入会員紹介

前回以後、次の方々が入会されました。今年は一三〇〇人に定着できるようにお願いいたします。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため
掲載できません。

二〇周年は定期講座も充実！
『備後古城記』を読む

【実施要項】

- 《座長》小林浩二さん(部会長代行)
- 《開催日》二月一九日(土)
- 《時間》午後七時～午後九時
- 《会場》福山市市民会館会議室
- 《注意》ご注意ください。都合により会場を変更しました。
- 《会費》資料代として一〇〇円程度

古墳講座Ⅶ

【実施要項】

- 《座長》山口哲晶さん(部会長)
- 《開催日》三月四日(土)
- 《時間》午後七時～午後九時
- 《会場》未定
- *希望者は山口さんに(福山市引野町二一三三七 千七二一〇九四一)に手紙でお問い合わせください。

歴史小説読書会

【実施要項】

- 《座長》種本実さん(部会長)
- 《開催日》四月一日(土)
- 《時間》午後二時～午後四時
- 《会場》福山市中央公民館(予定)
- 《四月の課題図書》『結城秀康』 大島昌宏著
- PHP文庫 定価六八六円

『古事記』を読む

【実施要項】

- 《座長》平田恵彦さん(事務局長)
- 《開催日》二月二二日(土)
- 三月一日(土)
- 《時間》午後二時～午後四時
- 《会場》福山市中央公民館
- 《会費》資料代として一〇〇円程度
- 《会報九四号の原稿募集》原稿締切 三月一八日(土) 必着

編集時間の都合で掲載できない場合がありますので早めにお送りください。原稿は一人一本に限り、本文「一行一六文字×二〇行」でちょうど一ページになります。以下、三行ごとに一ページの一段分になります。四〇〇字詰め原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空けて書いてください。

ワープロ原稿は大歓迎です。そのままでも結構ですが、テキストファイルを作ることでワープロやパソコン(ここ五年以内に購入されたものだったらOK)の場合は、キストファイルを作成してフロッピーと印字原稿両方ともお送り下さい。今回は予算の都合上、二ページ以内でお願いします(依頼原稿は例外)。皆さんの会報です。身近な話題でもOK。どしどしお寄せ下さい。

青春きつぷの旅

師走の難波夕陽丘を訪ねて

小林 さなえ

師走一九日、暗闇の福山駅を午前五時に出発、東福山乗車の私たちも合流して、総勢三七人の歴史と探訪好きの集団が、寒風吹きすさぶ難波四天王寺の境内に十時に到着。それから約五時間の史跡めぐりを堪能しました。

平田さんの資料のタイトルは「日輪は四天王寺の天空に輝く」。私はその題に魅力を感じて参加した一人ですが、皆さんはどのように感じられましたか？その旅をつれづれに回想したいと思います。

西暦五九二年、推古女帝が即位、仏教を国の宗教として公にし、聖徳太子が摂政となって政務を取り始めました。四天王寺はその翌年、日本初の官寺として荒陵（茶臼山古墳近辺）に創建されたといわれています。

堂宇は南北に中門・塔・金堂・講堂の順で一直線に並んでいます。百済に多い伽藍配置で、「四天王寺式」といわれています。大和朝廷の外港難波の津、国際交流の舞台にふさわしい壮大な建築、太子の国造りの一端に触れ、現在の国のかたちを考えさせられました。

四天王寺で驚かされることは、創建当初の敬田院・施業院・寮病院・悲田院の四院創立の志が、そのまま現在もこの寺の学校法人・社会奉仕法人・老人福祉法人・医療法人などに受け継がれていることです。国の安泰を願って建てられた施設が、千数百年をへていまでも生き続けていることに感動しました。

今回の探訪では縄文時代から続く上町台地の地形がよくわかりました。古代には入海が奈良県境の生駒山麓の近くまで入り込み、上町台地はその入り海に突き出る半島でした。台地の西側には茅渚（ちづ）の海（大阪湾）が広がっていましたが、長い年月をかけて埋め立てられ、いまでは市街地となっています。そのため起伏の少ない市の中心部では、上町台地だけが大きな高まりとなっているのです。その台地の南の付け根に残る茶臼山古墳（荒陵）は、四天王寺公園の川底池先端の丘陵上に築かれていて、大阪市街地に残る三つの前方後円墳の一つとされています。これは京大の梅原末治氏が調査し、前方後円墳と発表したためですが、最近では円墳説もでており、結論は留保されています。その名のおり現状は荒れ果てていますが、木々の繁った森と池の風景を前にして古代人との対話

を体感できたのは確かです。でも専門的な論争はどちらでも……。

実は、茶臼山古墳は大坂冬の陣で徳川家康が本陣を置いたところでもあるのです。対する真田幸村は大坂城四天王口に真田丸を築き、家康への攻撃を退けたことは有名です。夏の陣では逆に幸村が茶臼山に陣を敷き、すぐ目の前にある一心寺に陣取る家康軍と激しい攻防戦を繰り広げました。ついに幸村は「目指すは家康の首ただひとつ！」と叫び、最後の突撃を敢行しました。

家康の本陣一心寺の筋向かいに安居神社があります。逢坂（国道二五号線）をはさんでいますが、五〇メートルも離れていません。ここに「真田幸村戦歿地」の碑が立っています。勇敢な幸村軍は、家康を自刃寸前まで追いつめた歴史に残る戦いをしたのでです。

一心寺では素晴らしい現代建築の山門に迎えられ、その扉には女流画家の秋野不矩氏の天女像が描かれました。木々の間から柔らかな光が洩れるイメージで、設計は女性の感性にぴったり感じるものがあります。殿方はしきりに裸婦の天女像にシャッターを押していらいっしやいました。確かに女性から見ても母性的な作品で、とても美しい天女像でし

たが、そのとき私は、山門両脇上の現代彫刻による七メートルの仁王像の逞しさに見入っていたのです。

この寺は浄土宗の宗祖法然が文治元年（一一八五）四間四方の草庵を結んだことに始まり、西方に沈む太陽に向かつて念仏を唱えて極楽浄土を願うという、感無量壽経の説く「日想観」の修業が古くから行われています。本堂の阿弥陀如来像の前に座り、目を閉じると自然に合掌しています。信仰心のない私でも日想観は受け入れやすいようです。でも極楽浄土を願う一心からとはいっても、どうしても受け入れ難いのが人骨で造られた仏像（お骨仏）でした。

逢坂から北側はいまでも夕陽丘という地名だそうです。時間旅行をして、丘の上から沈む原初の日輪を一目見てみたいと思いました。

坂道をアツプダウンするうち最後の探訪地、大阪最古の神・生国魂神社（難波大社）の社前に到着しました。祭神は生島神・足島神を主神とし、併せて大物主神を祀っています。古代、難波の津で齋行される祭として八十島祭がありました。八十島とは大八洲つまり国土の別名で、その神霊こそ生島神・足島神だとされています。この祭は大嘗祭の翌年に行われ、天皇の国土支配権にかかわ

るとても重要な意味をもっています。あるいは大和政権成立以前には、この地の首長の即位儀礼として行われていたのかもしれない。

祭儀の内容ですが、まず侍典に任命された女官(多くは新天皇の乳母)が祭司となつて、生島巫・宮主とともに難波の津を訪れます。そして祭壇を築き、天皇の衣を納めた筥(箱)を開いて衣を取り出し、琴の音に合わせて海に向かって振り動かすというものです。

大八洲の国魂は、各地の支配者、それぞれの地域に存在した神霊でしょう。衣を振ることによってその靈力を衣に附着させ、さらに天皇がそれを身につけることによつて体内に取り込むうとしているのだと思います。これはいわゆる「魂振り」と呼ばれる呪術です。奈良時代、光仁天皇以前の天皇が、即位後、必ず難波宮を訪れているのはこの八十島祭のためだと考えられています。

上町台地の急な坂道の上で、難波から大阪への地名の移り変わりや、その長い歴史に思いをはせると、この散歩がとても有意義なものに感じられました。

福山でも初雪が舞った寒い日、三七名もまた天王寺の天空に輝いていました。

春の青春さつぷの旅
桜花爛漫、
醍醐蒼天に咲き薫る

洛南の名園と小野小町・日野富子
親鸞の古里を味わう

山科から洛南にかけて以前は交通が不便でしたが、地下鉄東西線が開通して探訪しやすくなりました。

この旅では、秀吉畢生の大イベント「醍醐の花見」を開いた醍醐寺を中心として、小野小町・日野富子・親鸞の古里——醍醐・小野・日野の地をじっくりと味わいます。

今回は拝観料がかなりかかるので(計二三〇〇円)参加費がいつもより高額です(ただ、それだけの価値はあります)。また、帰着時刻がやや遅くなります。この二点をご納得の上ご参加ください。

【実施要項】

《実施日》三月二十六日(日)

*雨天の場合は四月二日に順延。

《集合時刻》午前四時四五分(厳守)

《集合場所》JR福山駅改札口前

《講師》平田恵彦さん(事務局局長)

《募集人数》四〇名(申込先着順)

《参加費》会員 六〇〇〇円

一般 六五〇〇円

(青春さつぷ代・傷害保険料・資料代・勤修寺拝観料「四〇〇円」・随

心院拝観料「四〇〇円」・醍醐寺三寶院拝観料「五〇〇円」・醍醐寺本堂・五重塔拝観料「六〇〇円」・法界寺拝観料「四〇〇円」を含みます。現地での交通費「約六〇〇円」は各自の負担です。

《帰福予定時刻》午後九時二〇分

(場合によっては午後九時四〇分)

《申し込み》平田事務局長宅へ

(TEL〇八四九—三三—三七八二)

《受付開始》二月一日(月)～

《受付時間》午後九時～午後一〇時

《キャンセル》三月二四日(金)夜

まで。これ以後はキャンセル料として二五〇〇円いただきます。

《その他》弁当・飲み物は各自持参。約八km歩きます。歩きやすい靴と服装でご参加ください。

【主な探訪予定地】

▼勤修寺門跡：真言宗。醍醐天皇が宮道氏出身の生母を弔うために建てた勅願寺。生母胤子は、小野の豪族宮道弥益の子列子と藤原高藤(正一位太政大臣追贈)の間に生まれた。庭園は池泉回遊式の名園。

▼隨心院門跡：真言宗。寺地は小野小町邸宅の伝承地。正暦二年(九九一)、仁海(宮道氏)が小野曼陀羅寺を創建したのが始まりという。

順徳・後堀河・四条三天皇の祈願所。梅林が有名だが、今回は品格のある殿舎と庭園を見学。小野小町化粧の井戸・文塚もある。

▼醍醐寺三寶院殿舎庭園：醍醐の花見に合わせて秀吉が造つた庭園(国特別史跡・特別名勝)は言葉を失うほど見事。国宝・重文の襖絵も多くあるのでお楽しみに。

▼醍醐寺(下醍醐)：本堂・五重塔ともに国宝。内陣拝観は春と秋だけなのでチャンスをお逃さず。今回は時間の関係で上醍醐は省略。

▼一言寺(金剛王院)：藤原入道信西の女阿波内侍が建立したという真言宗醍醐派の別格本山。残念ながら本尊は秘仏のため拝観不可。

▼平重衡の墓：東大寺大仏殿を焼き討ちした悪名高い平重衡、いまはただ史跡公園に静かに眠る。

▼法界寺(日野薬師)：日野流藤原氏の菩提寺で一族の結合の紐帯となった。阿弥陀堂・阿弥陀如来像とともに国宝。平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像とともに定朝様の双壁。薬師堂は重文。いま「日野のお薬師さん」は民間信仰で栄えている。

▼日野誕生院：親鸞は皇太后宮大進日野有範の子として生まれた。誕生院はその生誕伝承地に建てられ、産湯の井戸・えな塚もある。

▼日野家墓所：日野有範の墓を中心に数基の五輪塔が並ぶ。

第二回郷土史講座

蛇円山からみた常城・茨城

福山市の最高峰蛇円山は、ふつう服部谷から登りますが、この谷には古代遺跡が集中しています。中でも北塚古墳は古墳時代終焉を考える上で全国的にも重要な古墳です。一方、新市からの登山口にも尾市古墳があり、これも典型的な終末期古墳です。しかも十字形の石室をもつものは全国で唯一です。このように蛇円山山麓には、古墳時代終末期に関わる遺跡が集まっているようにみえます。そうして尾市古墳をはさんで向かいの山が古代山城「常城」の推定地なのです。尾市古墳の被葬者と常城が何らかの関係があるとすれば、常城と蛇円山、あるいは山麓の服部谷との関係も重要になってきます。

歴史研のホープ寺崎さんが、大胆な推理で蛇円山の謎に挑戦します。

【実施要項】

講師 寺崎久徳さん

(歴史研・事務局役員)

開催日 二月二六日(土)

時間 午後二時～午後四時

会場 ふくやま市民交流館

福山市丸之内一―九一五

注意!都合により変更しました。

会費 資料代として一〇〇円程度

今年初、三月バス例会

夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ

津山はここ七年間で三回目になります。前二回とはまったく異なる視点から探訪地を選んでみました。鶴山城・衆楽園・中山神社以外にも多くの素晴らしい史跡があることを体感できるコースです。中でも、もう一つの津山城ともいべき神楽尾城は、だれでも登ることができ、しかも遺構が明瞭に残っているので山城上級者・初心者とも満足していただけると思います。

【実施要項】

開催日 三月五日(日)雨天決行

集合時刻 午前七時四五分(厳守)

集合場所 JR福山駅北口

講師 平田恵彦さん(事務局長)

平田雅郁さん(評議員)

募集人数 四八名(申込先着順)

参加費 会員 四八〇〇円

一般 五三〇〇円

傷害保険料・資料代を含みます

帰着予定時刻 午後六時ころ

受付開始 二月八日(火)

(事務局へ電話かガキで)

その他 弁当・飲み物は各自持参。

歩きやすい靴(運動靴や登山靴)と

服装で二参加ください。

【主な探訪予定地】

久米麿寺・久米郡衙跡：県史跡。白鳳時代の寺院跡と同時代の郡衙が近接して発見された。

神楽尾城：山城の遺構がよく残り、しかも登りやすいという、見学するには理想的な山城。天文年間に山名氏兼が在城。その後毛利氏に渡ってから織田方になった宇喜多氏の荒神山城との戦いとなり落城。遺構は本丸・二の丸・三の丸・馬場・武者溜まりからなっており、鳥が翼を広げたような放射状連郭式山城である。その規模と構造から美作有数の山城と断言できる。

鶴山八幡宮：本殿(国重文)は桃山期様式をよく残している。拝殿・釣殿は県重文。津山藩初代藩主森忠政(蘭丸の弟)が創建し、現社殿は二代長継によるもの。

妙願寺：「浄土真宗中本山・御坊」と格式が高い寺。森氏の祈願寺で、忠政の母妙向尼の画像が残る。代々森氏が世襲で住持となり、現在の森嵩正氏は一五代になる。

本源寺：森家菩提寺。初代忠政の院号「本源院」から寺号がついた。御霊屋(位牌安置所)の背後に忠政のはじめとして六基の大きな五輪塔が並んでいる。

泰安寺：津山藩松平家の菩提寺。

森氏のあと松平氏は九代続いた。初代宣富の宝篋印塔はとくに立派。

町並み散策：箕作阮甫旧宅(国史跡)や植原六郎左衛門旧宅・津田真道生家跡・だんじり資料館などが立ち並ぶ旧家城下町を散策する。

*もし時間が余れば、帰りに作楽神社・院庄館跡を探訪します。

*天候その他の都合により探訪地は変更する場合があります。

総会で年会費改定議決

平成一二年総会における議決により、今年度から一般会員・夫婦会員の年会費を次のとおり改定いたしました。諸般の事情により、それぞれ千円ずつの値上げになりますが、なにとぞご了承下さい。

一般会員 四〇〇〇円

夫婦会員 五〇〇〇円

郵便振替用紙を同封いたしましたので二月中にお振り込み下さい。

編集後記

二〇周年のスタート。この一年「初心忘るべからず」の格言とおり、入会したときの気持ちにかえって取り組む決意です。(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇六六

福山市多治米町五一―九一八

☎〇八四九(五三二六一五七)